

「満蒙開拓青少年義勇軍」の生成と終焉

—戦時下の青雲の志の涯てに—

田 中 寛

The Beginning and End of the Youth Troops sent to Manchuria-Mongoria : Lofty Resolutions during the War

Hiroshi Tanaka

目次

序 内原まで	八 中国における「義勇軍」の史的位置づけ
壺 満蒙開拓青少年義勇軍とは	九 いま、なぜ満蒙開拓青少年義勇軍か
式 満蒙開拓青少年義勇軍の編成	拾 民衆の犠牲と国家の責任を問う
参 内原訓練所と「拓土」の精神	終章 おわりに—「歴史の継承」とは何か—
肆 曠野の現実（その1）	附記
伍 曠野の現実（その2）	注記
六 曠野の現実（その3）	文献
七 戦時下青少年ファシズム教育の頂点	資料 義勇軍編成に関する建白書、入植地図

われらは若き義勇軍

力ぞ愛ぞ王道の 旗ひるがえし行くところ

見よ共栄の光あり 見よ共栄の光あり

（「われら若き義勇軍」より、『義勇隊唱歌集』収録）

序. 内原まで

内原の桜は美しいという。桜吹雪は華やかさのなかになぜか悲壮感をただよわせる。そして、闇に消炎した生命の非業さをも感じさせる。梶井基次郎の「桜の樹の下には」や坂口安吾の「桜の森の満開の下」を思い起こすまでもなく、その艶やかさのあまりに私もまた死者たちの物言わぬ祝祭とグロテスクなまでの悲しみの極地を幻覚するときがあるのだ。私はいつか内原の桜を見たいと思った。

ロマンスシートにゆったりと腰をしずめ、日頃めったに乗らない常磐線の閑かな旅にしばし心

を和ませる。東京とくらべて幾分開花の時期が遅い。桜前線を北上するような気分で車窓からは見事な桜並木が眺められた。途中で小さな牧場が目に入ったが、戦後ここに入植してきた人たちの開拓の歴史の一コマであったのかもしれない。...

上野から常磐線各駅停車で約二時間、内原駅に着く。満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所跡は駅から約1.2キロのところにある。徒歩25分の距離だが、駅前の地図で確認して、タクシーで向かうことにした。線路を跨いでまっすぐ走り、やがて田園にさしかかる。今も残る桜並木の「渡満道路」を通り抜けると、正面に記念碑がひときわ高く聳える訓練所跡日輪舎に到着した。途中、予期したように満開の桜が目眩だった。そこが内原という、かつての満洲移民を送り出した「聖地」であったればこそ、散華の象徴として映ったのかもしれない。

ふと、時代がタイムスリップするのを感じた。東京の喧騒を離れて田園の中の静寂に辿りついたという空間の移動が時間の遡行へと入れ替わった。事前に訪問の日時を知らせておいたので館長の黒澤穀一氏の出迎えを受けた。公民館の管轄になっている「記念館」には常駐の係員もない。したがって見学するにはあらかじめ連絡しておかなければならないという不自由さがある。入口に記帳録があったが、つい先日も遠く宮崎からも取材に来られたと言う。今日も年配の方が遠方からだろうか、四五名、見学に訪れていた。

記念館は実物の日輪舎を約1メートル縮小して復元したもので、蒙古民族のパオを模して造られた構造がよく分かる。建築費も安く、しかも短期間で出来るという利点はあったが、このような異様な建物を根城に集団で強烈な精神教育を実践したということは一方で、ここがまさに一般社会から隔絶された世界でもあったことを想像させるに十分であった。

内原を一度訪ねてみたい。一戦争も「満洲」も遠い戦後世代の私がふとそう思うようになったのはつい二年ほど前のことである。1999年8月、中国黒龍江省の哈爾濱市黒龍江省档案館（公文書館）が外国人記者に一般公開された際、展示されていた銃剣を持つ若き武装移民、満蒙開拓青少年義勇軍の写真パネルが鮮烈に脳裏に焼きついたのである。

年端もゆかぬ、純真な童顔の少年が武装移民であったとは！そして後日、新聞に内原の記事が紹介されているのを読んだ。以下は少し長くなるが新聞記事の引用である^{注1)}。

戦時中、旧満州国（中国東北部）へ続々と送りこまれた満蒙開拓青少年義勇軍を記念する資料館が、基礎訓練所のあった茨城県内原町に建設されることになった。「我々の足跡をとどめる恒久的な資料館を」とのOBたちの要望を受けて、町が来年度中の建設を決めた。一方で、義勇軍は大陸侵略の歴史とも重なり、「美化するわけにはいかない」との声もあり、展示内容や表現をどうするか、町は悩んでいる。

満蒙開拓青少年義勇軍は二十年間で百万人を満州に移住させる国策に沿って、1937年に創設が閣議決定された。翌年、内原訓練所が開設され、募集に応じて、全国から集まった15歳から19歳までの若者がここで約二カ月間、農業教育や軍事教練を受けた。入所者は8万6千

5百人余に上ったとされる。

義勇軍出身者約六百五十人で作る内原訓練所史跡保存会は1985年、町の助成を受けて、寄宿舎だった円形の建物「日輪舎」を復元し、当時使った衣服や農具、手帳などの資料を展示してきた。しかし、老朽化が進んだことなどから、再三、町に資料館建設を要望してきた。OBの熱意と、義勇軍の故郷としての町おこしのねらいもあって、大関茂町長は来年度中の建設を決断。今年度予算に一千万円の調査・設計費を計上。見込まれる建設費二億五千万円のほぼ半分はOBからの寄付で賄う計画だ。

だが、資料館では義勇軍だけを取り上げるのか、町のほかの歴史的資料も一緒に展示するのか、名称はどうするのかなど、内容はまだ何も決まっていない。義勇軍はソ満国境の防備も担い、軍事関連の作業に従事する人も多く、侵略と切り離せない側面があり、評価も様々なためだ。OBの一人で、保存会事務局長の中崎一道さん（＝水戸市在住）は「我々は『お国のため』という純粋な気持ちで開拓したのであって侵略の意識はなかった。我々の足跡を形に残していただきたいんです」と胸の内を語る。

しかし、ある町幹部は「結果的に植民地化の一翼を担ったのは事実で、美化するわけにはいかない」と言い切る。大関町長も高齢化していくOBに同情を示しながらも、「展示の中で、『侵略』という言葉を使うべきかどうか、専門家の意見を聞いて考えたい。資料館で伝えたいのは、この地に訓練所があった史実」と話している。（朝日新聞2000年8月7日夕刊）

満蒙開拓という国策に隠された、戦時下の民衆暴虐の史実は何としても後世に語り継がなければならない。だが、真実を知らされずに赴いた無辜の青少年たちの悲劇を前に、「侵略」の尖兵であったと位置づけるのには躊躇いと抵抗があるというのである。

壺。満蒙開拓青少年義勇軍とは

一、われらは若き義勇軍

祖国の為ぞ鋤とりて 萬里涯なき野に立たむ
いま開拓の意気高し いま開拓の意気高し

二、われらは若き義勇軍

祖先の氣迫享けつぎて 勇躍夙にさきがけむ
打ち振る腕に響あり 打ち振る腕に響あり

三、われらは若き義勇軍

秋こそ来れ 満蒙に 第二の祖国うち樹てむ
輝く緑空をうつ 輝く緑空をうつ

四、われらは若き義勇軍

力ぞ愛ぞ王道の 旗ひるがえし行くところ

見よ共栄の光あり 見よ共栄の光あり

(『義勇隊唱歌集』より 星川良夏作詞 飯田信夫作曲「われら若き義勇軍」)

満蒙開拓青少年義勇軍一。それは何と凛々しい名称であろう。だが、その実態は眼も覆うばかりの非道な国策であり、これによって若き命を奪われ、翻弄された人々が何万もいたという非情な歴史をどのように位置づけ、後世に語り継いでいくべきか。「満洲」移民の順風に乗せられ、夢と野望を抱いて沃野の開拓に邁進するも理想と現実の溝は思いのほか大きく、やがて失意のうちに中国人民の土地を掠奪、蹂躪するといった日常的軋轢をも繰返すようになる。そしてソ連軍の侵攻の際には、いち早く反満抗日民衆の襲撃をも受け、地獄図の世界をさまよい、さらにはシベリア強制労働、抑留の運命にも連なったのであった。飢餓や病死の実態もほとんど空白のまま、一瞬の露となって大地から消えた。まさに忘れ去られた現代史の暗影というべきであろう。

今、満蒙開拓青少年義勇軍の実態について語られる機会はほとんどない。満洲開拓移民の果ての中国残留孤児の問題にはスポットが当てられるものの、その前史をなす惨劇、とりわけ青少年義勇軍（以下、義勇軍と略記）の史実は今や風化されようとしている。歴史教科書にもこの誤った国策の史実は記載されていない。国家的体裁からは「棄民」として明確に位置づけさせたくないとの思いもあるのだろう。研究書ではない一般的な読み物としては上笙一郎氏の『満蒙開拓青少年義勇軍』があるが、すでに刊行後約30年が経過している。一般に知られないのも当然といえば当然である^{注2)}。満洲開拓移民関係の記録は各種の手記を含めれば膨大な数にのぼるが、義勇軍に関する一般書が今日、身近に見当たらないのは非常に残念なことである。

専門研究に目を移せば、これまで、義勇軍については満洲開拓移民研究の一環として多くの考察がなされている一方、その独自性についての研究が明確になってきている。

まず、義勇軍（以下、この名称を用いる）関係の総合的資料集としては、『満蒙開拓青少年義勇軍関係資料』全7巻（不二出版1993）がある。白取道博氏の一連の研究は義勇軍の創設から送出までを多くの資料を駆使して克明に記述したもので、現在、最も信頼し得る精確な分析となっている。櫻本富雄氏の『満蒙開拓青少年義勇軍』も綿密な調査によって書かれたもので、全貌を知るのに至便である。また、伊藤宣正編『教科書が書かない戦争 満蒙開拓青少年義勇軍 中学生も平和を考える』（1997）も現代のほぼ同世代の少年少女の目にかつての義勇軍がどのように映ったかを知る意味でも貴重な記録になっている。

さらに近年、義勇軍を送り出した教師の戦争責任問題が注目されているが、その研究成果として『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』（長野県歴史教育者協議会編、大月書店2000）がある。また『満洲移民関係資料集成』が第一期全40巻に引き続き第二期全23巻（不二出版2000）が刊行されている。満洲移住協会の機関誌（『拓け満蒙』『新満洲』『開拓』）を全号収録したもので、昭和20年までの移民の実態が克明に紹介されている。その中にも義勇軍を紹介した記事が多く見られる。例えば、『拓け満蒙』臨時増刊号（昭和13年11月号）では、次のような解説、宣伝記事が掲載され

ている。

武装移民から青少年義勇軍へ国策となるまで	矢島庸人
青少年義勇軍とは何か	満州移住協会宣伝部
皇国少年の大道場 内原訓練所を視る	
義勇軍青少年に激励袋を送れ！！	

こうした雑誌の記事の見出しを見ても、当時の政府の義勇軍に寄せる期待がいかに大きかったかということが、そして官民あげての一大「民族移動」をマスコミまでが狂気のように煽っていた実態が分かる。とりわけ、満州移住協会らの宣伝活動の果たした役割は絶大であった^{注3)}。いま、その背景と経緯を概観しておこう。

1930年代の金融恐慌後の日本の慢性的な農村の疲弊、相次ぐ天災で打撃を受けた国内の農地の不足を打開する目的で満蒙開拓団が満洲に送り込まれたのは1932年以降であった。農家の次男、三男を中心に「入植」を進めるも、昭和12年の日中戦争の勃発、昭和16年の太平洋戦争の勃発により、国内の応召、軍需労務が優先され、その結果、満蒙開拓民送出計画が事実上、遂行不可能となり、これを補うために昭和16年以降は19歳以下の若者が満蒙開拓青少年義勇軍として、送り出されることになったのである。それは鍋釜や貴金属を戦時供出したのと同じように人間を鉄屑同然と見なした、史上稀なる強制的な国策であったといえよう。

中国東北部を入植地とする移民政策は、1932年以降数次にわたる試験移民を経て、1937年から「二十ヶ年百万戸送出計画」にもとづき本格化する。そして、満蒙開拓にあたっては純心、無垢な青少年に期待が寄せられたが、建白書（本稿末尾資料）にもあるように、これは青少年をして尖鋭な皇道主義教育を植えつけるのに最も適していたからであった。農村救済と満洲開拓という一挙両得の期待を背負って1936年、「満蒙開拓青少年義勇軍」は結成される。数え年15から19歳までの男子を対象とする義勇軍は延べ8万人以上、1938年から1945年まで満洲移民の主流と位置付けられたが、実際は関東軍の南方への根こそぎ供出の後を補充するための、また近い将来に來たるべき対ソ戦に備えての軍事・治安上の役割をも補完し続けた。年間5万人を目標としたが、その背景には小学校高等科卒業予定者から教員の指導によって応募者が決定されるというケースが多かったこともあり、義勇軍は、単なる移民制度以上に、当時の日本ファシズムによる青少年教育の一大産物であったといえる^{注4)}。ここには後述するように「義勇軍」という組織の生成が「総力戦」の名において無辜の民を「北方鎮護」と「戦争物資増産」を「盾」にした、大戦末期の「一億特攻」的な玉砕への道筋としてすでに醸成されていたと言える。

だが、「純粋な」生成はかならずしもその顛末、終焉を見越して発動されるものではない。むしろ時代の一部の跳ね上がりの為政者や狂信的なイデオロギーによって奈落の運命へと突き落とされることが数少なくないことを幾多の歴史は語っている。

果たして、その義勇軍の「生成」と「終焉」はどのようなものであったか。――

式. 満蒙開拓青少年義勇軍の生成

『満蒙開拓青少年義勇軍』と題した写真集がある。編者は全国拓友協議会、制作は社団法人家の光協会、昭和50年の発行のもので、その最初の頁のほうに「郷土中隊全員の社頭祈念」と題した見開きの写真がある。まさにナチスドイツのヒットラーユーゲントを彷彿させる、整然とした壮観である。数えてみると三百人はいるだろう。とくに前列近くには最も若い年齢の丸刈りの少年が不安そうな目でカメラをのぞいている。脚半を巻いた脚が痛々しく、あどけない表情にはどことなく不安の暗い翳がある。

当時、旧南洋群島の「海の生命線」になぞらえて、「満洲は日本の生命線」として資源確保の最前線と謳われたが、「東洋の礎を築く」などの学校教師たちの積極的な働きかけに応じた彼等はまた、純心な気持ちで国策の正しさを信じて疑わず、大陸での開拓村の建設のほか、国境防衛のための軍部への協力なども要請されたのであった。

義勇軍として渡った彼等の出身地は全国に点在するが、入植地は主として国境の黒河、興安嶺方面が多く、自然環境も最も過酷な厳寒地であった。義勇軍の入植地が国境に集中していたことは、開拓地が手薄だったという見解もあるが、やはり第一に軍事的な目的が当初から目論まれていたと考えるのが妥当であろう。現地特別訓練所、嚮導訓練所における軍事教練を重視した訓練もそうした彼等の役割を十分にふまえたものであった^{注5)}。

さて、こうした義勇軍を当時の日本人、特に知識階級はどのように見ていたのだろうか。のちに「大東亜戦争肯定論」を主張する林房雄は『文藝春秋』誌の昭和13年5月号に内原を視察訪問した報告を発表している。林房雄は金剛杖を携えて敬礼をする15歳の少年を背後にしたがえ写真におさまっている。キャプションには次のようにある。

アジアを拓く少年義勇軍

こんな小さい少年までが、満洲へ行くと云ふのだ!! 今年一杯で三萬人、来年は十萬の少年を教育して、満洲の各地に植民させるといふ愕くべき計画が、黙々として現在行われてゐる。

!!大陸国家として、いよいよ本腰を据ゑた新日本は今ここ―水戸近郊内原の地に創意と革新の意気に燃えて、新しき出発の準備をしてゐる!!

林房雄は漲る澆刺とした少年たち、毅然たる青年たちを見て、「維新の頃の青年たちはこのやうな顔をしてゐたかもしれない」と興奮気味に述べている。「労働が即ち喜びのやうに見える」とも言う。「冒険ダン吉」の漫画に出て来るようなそれを、少年たちは南洋の土人の「蛮舎」のようだと笑ったが、それにしてもこの「日の丸トーチカ」は少年の冒険心、曠野へ向かう創意を強くくすぐるものであった。最後の締めくくりでは林はこうも喝破している。

「来年一杯で十万人の少年義勇軍が渡満して国境線に日の丸トーチカをならべたら、××はもう取ったやうなものだ、と杉野忠夫は言っているさうだ。この国境線の少年兵士たちに慰問袋を送る人々はゐないか」

伏字になっている「××」の二字はおそらく「天下」と読める。林房雄は1930年代には東大新人会のリーダーとして日本ファシズム批判の先導者であったが、1933年の共産党一斉検挙の後、獄中転向してからは、一貫して御用論客として筆をふるったことでも知られる。内原視察記の〈感涙〉は国民の〈同情〉を喚起し、国威発揚を素朴に訴えるものではあった注6)。

内原では以上のような光景であったが、いざ渡満し入植した後の現実はどうであったか。

小林秀雄（評論家1911—1968）は年譜によれば昭和13年10月から12月にかけて岡田春吉と朝鮮・満洲・華北（慶洲—新京—吉林—ハルビン—黒河—孫呉—綏稜—熱河—北京）を旅行した。翌年1月に「満洲の印象」なる手記を雑誌『改造』に連載するが、その中に義勇軍訓練所の一つである孫呉を訪れ、荒涼とした光景を次のように述べている。（傍点、引用者）

… 便所は戸外にある。柱とアンペラと竹とで出来ている。小便をしていると、中から少年たちの屁の音や、糞を息む声が聞こえ、僕は不覚の涙を流した。こんなにまでしても必要な仕事かと思ったのではない。こんなにまでしてもやらねばならない仕事の必要さという考えが切なかったのである。（中略）

… 関係者に案内されて、現地で見た光景は美辞麗句で飾られた入植の世界ではなかった。栄養の悪い条件のもとでの労働の数々。それまでの旅程で見聞した満洲各地での日本人の生活とはあまりにも隔絶された世界であった。

無論、僕は、訓練所の仕事そのものに疑念を抱いたわけではなく、いや寧ろその必要は、実地に見て痛感した次第なのであるが、仕事のやり方については疑念を抱かざるを得なかった。だが、この疑念の説明となると、僕の才能を超える。僕は、ただ漠然と、いかにも素人らしく、欠陥は案外根本的な処に、満拓公社という恐らく官僚的な頑固な組織と、何を置いても先ず臨機応変の手腕を要するこの新しい仕事の実際との決定的な齟齬にあるのではあるまいか、と思った。満洲には訓練所は五箇所ある。その一箇所を瞥見した者の疑念が杞憂に過ぎぬ事を念ずるが、専門家の静な根本的研究を煩わしたいという考えが捨てられぬ。

小林秀雄はいわゆる従軍作家・記者として数次に渡り中国の戦線取材しているが、「御用作家」の彼でさえ、また当時の軍の検閲下でさえも、こうした荒涼とした状況を目の前にして嘆息つかざるを得なかったのである。文面からは気持ちを冷静に抑えた重苦しさが伝わってくる。実際はこれ以上の、閉鎖的な荒んだ寂寥と不安に覆われた生活と訓練であったことがうかがわれる。なお、現地訓練の実態は、第肆章、第伍章、第六章でふれることにしたい。

ここで、義勇軍の性格を一般の開拓移民のケースと比較してその特徴を概観しておくことにしたい。当時の一般的な認識を代表すると思われる『興亜ノート 新東亜の時事問題早分かり』（新東亜研究会1939）によってみてみることにしよう。

【満蒙開拓青少年義勇軍】

農業集団移民や自由移民が、昭和7、8年頃から開始されたのに反し、これは昭和13年から行われた。入植人員は昭和13年度三万名、14年度三万名である。これは政府の補助により満洲拓殖公社の経営の下に現地で大訓練所生活1ヵ年、小訓練所2ヶ所合計三ヵ年の集団訓練の後、大部分は農業集団移民に転化して行き、一部は自由移民、又若干は軍警、技術者その他満洲産業5ヵ年計画が要求する諸種の機関の幹部となって満洲建設のために収容されていくものである。毎年数回各府県で募集するが、年齢は数え年16から19歳、学歴は尋常小学校卒業程度、身体強健、思想穩健の青少年で、独身で渡満し得る者に限られている。

(58-59頁)

たったこれだけの説明で義勇軍の実態が述べ尽くされているというわけではない。手当て、恩典も書かれていなければ、実際の職務作業についても不明である。訓練のあとは、自営的「農業集団移民に転化していく」とあるが、この「農業集団移民」についても同資料によって解説を付しておかなければならない。

【満洲農業集団移民】

昭和6年の満洲事変を契機として、満洲国の建国となったが、日満が手を握って真の王道楽土を建設するためには、どうしても日本の優秀な農村の人達を満洲国に送って向こうの農村の人々と土を通して固く握手し、それらの一々を指導して行くことが最も必要である。そこで満洲事変が終ると、すぐに移民の必要が叫ばれて移民運動が起こった。そして拓務省の下にこれが実行されることになり、昭和7年の秋9月に北満洲三江省へ第一回の武装移民団を送ったのを手始めに、第二次、第三次...と次々に移民団を送り、その人々は着々と移民村の建設に成功し、又それに向って努力を傾倒している。わが政府に於いては更に大量に移民を送ることに乗出し、所謂満洲移民を国策として昭和12年から昭和20ヵ年の間に百万戸を目標とし、差当って5ヵ年に十万户の大量移民を彼地へ送ることになっている。

これに対する政府の補助は、先ず補助金として大体、戸別補助と公共施設補助とを併せて、1戸当り千円となっている。戸別補助は渡航の費用、農具費、家屋建築費、家畜費、農産加工場、木工場、鍛工工場等の施設費等として補助され、又公共施設補助としては組合事務所の建物費、診療所の建築費、医療費として補助されるものである。その他の政府補助としては、保護施設として移住地に農事指導員を置いて、農業畜産を指導したり、警備指導員を置

いて警備に当らせたり、医者置いて衛生、医療に遺憾なからしめており、又土地の分割、農業を営むに必要な資金を融通することなどを満洲拓殖公社をして斡旋させている。土地の分譲は大体1戸につき約10町歩の耕地が標準で、その外、山林、放牧地を加えて分譲されるのである。因みに応募者は各府県庁の職業課又は社会課に照会されたならば一切便宜が図られるが、又拓務省拓務局東亜第一課或いは満洲移住協会宣伝課に照会されてもよい。

(同55-57頁)

ここで云う「分譲」の中身がどのようなものであったかは、実際に移民として赴いてはじめて分かるものであった。ついでに「満洲自由移民」についても見ておこう。

【満洲自由移民】

これには二つの種類がある。農業自由移民と自由移民であるが、農業自由移民とは平均三十、四十戸ないし百戸で一団を組織し、団長の下に団員自らが設計する営農計画に基いて耕作すること、営農地は団員自らが物色するという二点において、すべてが政府の統制によって入植し運営して行く農業集団移民とは著しく異なっている。

例えば新京、ハルビン等の大都会の近傍で蔬菜を栽培したり、乳牛飼養をしたりして、これら消費地に迅速に物資を供給し、或いは密林地帯に伐材を業として入植したり、すべて移民団個々の自主的決定による意図を以ってなすもので、此の種の移民は現在約四十村近くあって、これらの分布は集団移民同様北満地帯に遍く散在している。政府の指導員は任命されず、また医療施設等もすべて独力で建設されるのである。次にその他の自由移民とは、すでに入植した集団農業移民の各家庭における労力補給のため、縁故移民として呼び寄せらるものや、その他商工移民鉅業移民等のことである。

自由移民の中、農業移民は1戸当り五百円政府の補助があり、その他の自由移民は渡航費として一人当り八十円が支給される。農業自由移民は原則として府県において募集を行わない。有志を集めて渡満し満洲拓殖会社に相談するわけである。

(57-58頁)

こうして比較してみると、「義勇軍」の職務は曖昧で、数値的な条件も明示されていない。上記移民団の「予備軍」としての性格だけが最も明解な位置付けではなかっただろうか。なお、満洲国に移民した開拓農民がどのように用地回収（奪収）していったかについては、ソ連軍侵攻の際の中国人による在満邦人への襲撃とも因果関係が指摘されるところでもあり、その経緯と方法については日中双方からの考証が必要である。これに関する最近の研究では、中国人研究者の視点から劉含発（2000，2003）の研究が詳しい。

なお、義勇軍に関する中国側の研究、見解については、第八章で後述する。

参. 内原訓練所と「拓士」の精神

さて、現存の内原訓練所跡は「歴史を語る 渡満道路と日輪舎」という新しい道標が入口に立てられ、ここが村起こしの「平成の内原十景」の一つであることを紹介している。

「兵舎」の前に高さ10メートル以上の見事な大理石の記念碑が立てられ、「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所之碑」と刻まれている。記念碑は内原町と全国拓友の拠金により昭和50年に建立された。その傍らには当時の数本の桜の古木が満開で、往時を偲ばせる。

記念碑の隣にある説明板には次のように記されている。

旧跡 満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所

義勇軍は、重要国策の一つとして昭和12年11月30日の閣議決定に基づき、昭和13年1月設立され、昭和20年終戦まで存続した。

設立の狙いは、当時、建国日浅い満洲—現在の中国東北部—一帯に広がる未墾の沃野に青少年を送出し、将来大規模経営の農業者を育成し豊かな農村を築き上げ、日満一体、民族協和の実をあげることにあった。

義勇軍の訓練は三ヶ年、そのほとんどは現地訓練であったが、このうち二～三カ月間基礎的訓練を行うためこの地に全国唯一ヶ所の内原訓練所が開設されたのである。

敷地は四十ヘクタール、三百余棟の日輪兵舎が林立し、常時約数千人の若人が眉を挙げ胸を張り、遠く大興安嶺の彼方に夢を馳せながら、此处に学んだ。その数八万六千五百三十名すべてが十五歳から十九歳迄の全国道府県で選抜された人達であった。

訓練の傍ら義勇軍は、当時要請された食糧増産の為に各地の援農や奉仕作業に数多く参加した。内原町武具池の改修工事もそのひとつで延十万人の隊員の勤労奉仕により成ったものである。「内原」の地名は、この訓練所によって全国にその名を知られるようになった。

〈内原訓練所史跡保存会〉

ここには、どういうわけか義勇軍が開拓移民として実際にどのようにかわり、どのような最期をたどったかは一言一行も記されていないのである。むしろ後段の奉仕の貢献に光が当てられている。不思議に思って、これまた隣に訓練所のシンボルでもあった本部展望哨全景と「拓魂」の二字が刻まれた石碑の裏手に回ってみると、次のような説明がある。

満蒙開拓青少年義勇軍は昭和十二年十一月三日時の内閣に提出された「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書」が同月三十日閣議の決定するところにより創立された。これに先立ち、この地内原に満洲移住協会並びに日本国民高等学校協会によって内原訓練所の建設が進められ、同十三年一月より義勇軍募集要項による内地訓練が開始されるに至った。

国策として発足した満蒙開拓青少年開拓義勇軍は満洲大陸に理想郷を建設せんと熱意に燃える青少年たちであった。

義勇軍は訓練所所長加藤完治の訓育を受け、三百余棟の簡素な日輪兵舎に起臥し、心身の鍛練を経て勇躍満蒙の曠野に赴いたのである。その数八万六千五百三十名。

内原は義勇軍の心のふるさとである。

綱領は次のとおりであった。

一、我等義勇軍ハ天祖の宏謨ヲ奉ジ心ヲ一ニシテ追進シ、身ヲ満州建国ノ聖業ニ捧ゲ、神明ニ誓ッテ天皇陛下ノ大御心ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス。

二、我等義勇軍ハ身ヲ以テ一徳一心、民族協和ノ理想ヲ実践シ、道義世界建設ノ礎石タランコトヲ期ス。

義勇軍は大陸の厳しい風雪に耐え、ひたすら理想の村づくりに邁進した。しかるに昭和二十年八月祖国の敗戦によりそのすべてが烏有に帰した。

以来三十年の歳月が流れた。われわれは志半ばに倒れた同志の遺志を偲び、義勇軍創設の趣旨を録し、永く後世への記念とする

ここに内原会並びに関係各位の協力を得て、その鴻志を刻み同志の碑とする。

昭和五十年五月三日

満蒙開拓青少年開拓義勇軍内原訓練所之碑建立委員会

委員長 那須 皓 全国拓友協議会

ここにもまことに理不尽なことに義勇軍の悲劇には一部触れているにとどまり、二度と誤った国策と戦争を繰り返すまいとする平和への祈願はないのである。はたして、これで彼等の「遺志」は報いられたと言えるのであろうか。

さて、「日輪舎」の中に一步足を踏み入れると、正面に「満蒙開拓青少年開拓義勇軍編成に関する建白書（抜粋）」^{注7}が大きく掲げられている。そして、義勇軍が使った生活用品、農具、手帳、炊事用具、衣服などが展示されてある。また壁には義勇軍の入植した地点が地図によって示されている。テーブルの上には訓練所で同時に行われた看護婦養成所の課程修了の証書などが置いてある。全国から集められたという書棚の「資料」も手記関係のものが大半で、これまで国内で出版されている研究図書資料は、これまたどういうわけか陳列されていない。入口にあった見学科に含まれる備えのパンフレットには保存会による史跡案内と義勇軍のあらまし、義勇隊入植図などの資料が提供されてはいるが、これだけではどうも史跡を後世に伝えたいとする願いが明確に伝わってこない。義勇軍の悲劇という主観的な感情がともすれば先行して、客観的な史実としての位置付けに乏しい印象はまぬがれない。おそらくこの方面の専門的な歴史研究、歴史検証をふまえた展示ではないことは一目して瞭然たるものがあつたが、これでは史跡保存が実体のない「観念的な」ものにしか映りかねない。来年にも新しい資料館の建設が予定されているにしては、

趣旨が十分に伝わりにくいとの印象を受けたのは、果たして私だけであっただろうか。

ここで、当時の内原訓練所の様子を前掲『写真集』の解説にしたがって見てみよう。

訓練所の面積約40ヘクタール。中央に弥栄広場があり、その周辺に広場を囲むようにして松林の中、1棟30から40人が寝泊りできる日輪兵舎が全部で323棟点在した。5棟で1個中隊をなし、全部で35個中隊あった。訓練所には正門を経て衛兵所があり、本部、望楼、基幹学校、城郭型の警備司令部、中隊本部、炊事場、また、広場の一角には弥栄神社があった。空から撮影した内原訓練所の写真があるが、まるで丸い穴のように見える。正面に訓練所本部があり、その傍らに望楼があって、大太鼓が備えつけられてあったという。起床、礼拝、食事、作業の開始と終了、点呼、消灯などのすべての日課はこの大太鼓とラッパを合図に行われた。

日輪兵舎は丸太に板囲い、杉皮の屋根という簡素な構造で、一つの兵舎に約60名、一個小隊が収容できた。建物を円形にしたのは、兵舎内の宥和を尊び日輪（太陽）を模したものと解されるが、簡易で応急な建築に最も適した構造であったからである。防寒と排水の為に兵舎の周囲の土を盛り上げて作られたそれは、古代の堅穴式住居をも思い起こさせた。

内原の朝は、望楼から朝靄をついて響く大太鼓の音で始まる。駆け足の後、朝夕の行事に遥拝があった。隊員たちは太陽に向かって、力の限りにこう叫んだという。

天晴れ、あな面白、あな手押し、あな明け、おけ。

こうした形而上的とも言える号令は理屈抜きに彼等の心を統合させる。そして加藤完治所長の師でもあった東大教授寛克彦の創案した「日本体操」と呼ばれる古神道理論にもとづく体操が繰り広げられた。とりわけ、「^な擲^うげ棄て」の一斉号令のもとに右腕を曲げて頬に掲げ、左腕を仰角に伸ばして鼓舞する瞬間こそが、青少年の胸を強く揺すぶったのである。

我等義勇軍ハ 天祖ノ宏謨ヲ奉ジ
心ヲ一ニシテ追進シ
身ヲ満洲建国ノ聖業ニ捧ゲ 神明ニ誓ッテ
天皇陛下ノ大御心ニ 副イ奉ランコトヲ期ス

我等義勇軍ハ 身ヲ以ッテ一徳一心
民族協和ノ理想ヲ実践シ
道義世界建設ノ礎石タランコトヲ期ス

...

日常の規範となったこの「義勇軍綱領」に見える「一徳一心」「民族協和」「道義世界」の確立も、

すべては「天皇」の「大御心」へと重なるものであった。

内原訓練所での「訓練」は基礎訓練、所外訓練、特技訓練の3種類に分けられた。全国から集結した訓練生は、壮絶な秩序世界の中に抛り込まれ、純粹の国粹主義的な精神に染め上げられてゆく。基本訓練では学習、武道、体育の科目が課せられた。訓練所では加藤完治の精神教育が強い影響を与え、年少者に対する労りの気風があったとされるが、実際は閉ざされた世界で青少年の精神は荒んでいったことが量られる。将来の厳しい開拓の困苦に耐えられるような修業が課せられ、加藤は直心影流・法定の型を、重い木刀を用いて習得させた。武道と農道を精神的に修養させる実践であった。誰よりも率先して苦勞を身に受けるという「率先窮行」の精神もその中でとりわけ強調された。

訓練所から外へ出た作業は所外訓練と称され、食料増産のために勤勞奉仕に各地に出かけたり、また近くの武具池の築堤工事などにも従事した。農業作業、開墾作業も集団で行われ、米作り、松の抜根作業などが重要な作業とされた。いずれも「大東亜に続く夢」を育むものとして鍛えられた。そして、特技訓練では若干名を選出して、あるいは当番制によって各班、すなわちラッパ鼓笛隊、畜産部、栄養班などが組織され、乗馬訓練、木工訓練、製炭作業訓練、鍛工訓練などが行われた。

内原での生活は整然としながらも厳しく、私情をはさまない軍隊生活のそれであった。大太鼓の音と不寝番の「起床！」の声に跳ね起き、蒲団をたたみ、靴をはき、巻脚氈を巻く。「××、洗面に行って参ります」の一声とともに洗面器を持って飛び出す。そして、点呼、礼拝、食前作業。食事の前に「みたましずめ」を行い、「食前感謝のことば」を唱和する。食事の後の食器洗い。そして、上記の訓練に明け暮れる。

規律ある生活をさらに律したものが軍事教練であった。これも将来の開拓の苦闘のほかに戦闘を予期しての訓練であり、立哨、道哨、巡回などの衛兵勤務も行われた。

内原訓練所には訓練生のための施設のほか、農場、病院、栄養課、渡満支度品倉庫、味噌・醤油の醸造所までもあった。また、内原訓練所に収容しきれない場合は、隣村の河和田分所においても同様の訓練が実施された。また、鰐淵村には幹部養成のための施設が整備された。いわゆる学生義勇軍で大学、高等学校の学生で満蒙開拓の指導者を養成するのが目的であった。幹部訓練所には大浴場、大講堂なども完備されていた。

その後、訓練生に“母性的な温かみ”を植え付けるために「義勇軍女子指導員」(寮母)も養成された。その養成所は東京の聖和学苑にあった。彼女達の運命もまた義勇軍と同じように痛ましい末路を辿ったのではないだろうか。

訓練所には視察、来訪者も絶えなかった。拓務大臣他の政府高官、皇族の視察に訓練生は分列行進を行い、士気を鼓舞して見せた。戦争末期には内地食料増産隊の訓練にも使用されるようになり、内原の名前は全国にとどろいた。そして、渡満の日程が下される。

支給された衣服類や柳行李を内原駅まで運搬する。渡満壮行式では訓辞、祝辞があり、それに

答える隊員の答辞がある。そして、天地をもゆさぶるほどの壮観なる大分列行進。隊員の手にもつ木刀は護身用でもあり、それはまた渡満の後に鍬の柄となった。

かくして「鍬の戦士」は誕生したのであった。――

家族の見送りを後に内原駅から東京へ。とくに昭和14年（1939年）6月8日には義勇軍二千五百人が東京市内を檜の木でつくった鍬を担いでパレードを行ったのも国策としての満洲移民を広く深く国民の胸中に焼き付けたのであった。宮城前にて弥栄（みやさか）三唱。郷土訪問を済ますと、祖国での最後の別れである。部隊がとるコースは、新潟から日本海を経て清津へ、敦賀から羅津へ、神戸もしくは下関から黄海を経て大連へ、下関から釜山を経て満州へ、の四つのコースがあったと言われる（本稿末尾【表3】「満洲開拓青年義勇隊入植図」参照）。

制服とともに支給された義勇軍手帳には次の「義勇軍心得」が遵守すべき日常の規範として記されていた。加藤完治が親に成り代わった気持ちで順不同に論じたものであった。

- | | |
|------------------|------------------|
| 一、古の武士に負けるな | 一、生命を尊び死を怖れるな |
| 一、仲良くせよ | 一、常に工夫せよ |
| 一、他民族を敬せよ | 一、家への便りを欠かすな |
| 一、他人に親切にせよ | 一、楽は人に譲り苦は己に引受けよ |
| 一、規律を重んじ命令に腹せ | 一、歩哨は任務を嚴重に守れ |
| 一、武器は大切にし手入れを怠るな | 一、農具も武器と心得よ |
| 一、部屋はよく整頓せよ | 一、灯火は外に洩らすな |
| 一、火の用心をせよ | 一、水を粗末にするな |
| 一、独りで外出するな | 一、堂々と歩け |
| 一、口を堅く結べ | 一、雑談を止めよ |
| 一、愚痴を言うな | 一、元気一杯で働け |
| 一、丈夫の時は身体を鍛錬せよ | 一、病気の時は医者言うことを守れ |
| 一、生水を飲むな | 一、毎週夜具類を干せ |

素朴な、純粋な教えを純血として注ぎ込まれた義勇軍は北満の「盾」となることも厭わずに、供出されたのであった。さらに現地では3年間の共同訓練が予定されていたが、主としてソ連との国境地帯の開拓地に入植していったため、ソ連参戦では最前線に取り残されることになる。訓練所の送出名簿によれば敗戦まで8万6530人が渡満、このうち実に約2万人が死亡ないし行方不明となって荒野に散華したのである。この国策の原案者の一人で最も積極的に推進した加藤完治は義勇軍の壮行式に臨んで、「丈夫で仲良く迷わずに」という激励の辞を送っている。年少の若者の心情を一にする素朴な心得であった。それにしても上記「心得」といい、何とも無責任な、精神一徹主義の送辞であろうか。加藤完治は満蒙開拓の祖とされる。敗戦の事実はその「開拓の軌

跡」を闇に葬ってしまったが、その教学の精神は、今も跡地に建つ日本農業実践学園に営々と引き継がれていることをあらためて認識する。記念碑の近くに鎮座する殉難の石碑が物言わぬ哀しみをつぶやいているかのようであった。

肆. 曠野の現実（その1）―「現地通信稿」から―

「渡満道路」を行進し、壮行式に見送られて、一体どれほどの青少年が「出兵」していったことであろうか。今、耳を澄ませば、当時の潮のような声が聞こえて来るようだ。そして、目を閉じれば、ホームの上、溢れんばかりの日の丸の小旗に打ち振られてはるか満洲の原野へと向かって二度と祖国の地を踏むことのできなかった、まだあどけない少年らの顔が目浮かぶ。そして曠野での現実には想像を絶するにあまりあった。

ここで義勇軍の現地における組織編成について概観する。国内で訓練期間を終えた義勇軍は現地に到着したのちは、開拓と国境警備に「青少年」では不釣り合いなこともあり、また「軍」が現地住民を刺激するとの配慮から「義勇隊」と名称を変え、青少年も「青年」に変更された(1938.4.1)。満洲国の義勇隊制度は内原に内地訓練所が正式設置されて一カ月後のことである。当初は満洲国における義勇隊の訓練は満洲拓植公社に一任されており、それまで満洲国政府は訓練所に対する部分的な資金援助を行っていたが、「満洲開拓政策基本要領」の「満洲国内における開拓青年義勇隊の管理運営機関として、日満両国開拓機関の協力合作による訓練本部を設置する」との規定(12-1)に基づき、訓練所としての本格的な整備が進められることになった。

1940年4月1日、「満洲開拓青年義勇隊訓練本部」が新京（現長春）に設立された。その業務は義勇隊の指導統制に関する条項、基本訓練所、特別訓練所、政府の指定する実務訓練所経営に関する条項、その他附帯業務であった。訓練本部は日満両国政府、満洲拓植公社、満鉄等の関係機関から構成され、職員もこれらの機関から派遣されたが、機構自体は満洲国政府の法人機関として位置づけられた。訓練所は政府の監督を受け、組織・運営をめぐっては本部長が政府から任命されるなど、政府の認可機関としての地歩を固めた。基本訓練を主体とする基本訓練所は訓練本部が、実務訓練所のうちの乙種実務訓練所は省、県がそれぞれ運営することになった。甲種実務訓練所は満洲拓植公社の経営に託されたが、翌1941年4月1日以降はその経営を訓練本部に移管された。すなわち義勇隊の訓練所建設などの業務はその一部が満洲拓植公社に委託されるほかは、訓練本部による一元的な指導管轄権が確立した。訓練本部による指導体制は省、県との連携がさらに強化され、基本訓練所、甲乙丙実務訓練所、特別訓練所は、以降は大本部訓練所、中本部訓練所、小訓練所に改称された。訓練本部は訓練所と省、県の連絡の緊密化を図るため、同年以降、濱江、北安、黒河、牡丹江、三江、東安、龍江の7省に訓練本部支部を設置した。省支部事務所は開拓庁に置かれ、訓練本部の派遣職員との協力によって運営された。

こうして義勇隊制度は日満関係機関の合作によって訓練本部を中心とする指導体制が確立された。満洲拓植公社の業務は縮小し、満洲国政府の中央・地方行政機関によって管掌されていった。

このことは義勇隊制度の内地の国策化から外地満洲国における国策化への移行を意味するものであった（以上の「義勇隊」制度確立の経緯は小都〔2003:89-90〕によって記述した。本稿末尾資料の【表1】は1939年4月現在の組織図で丙種訓練所は含んでいない。甲種、乙種も実務訓練所以前は小訓練所と称した。また【表3】によれば義勇隊開拓団は78、訓練所は43を数える。その大部分はソ連の防壁と目された東安省、三江省、北安省、黒河省に集中していることが分かる）。

当時の拓務省拓務局の発行した『満蒙開拓青少年義勇軍現地通信集』という70余頁の小冊子がある。昭和13年12月の日付から、最も最初に入植した団の手記である。

第1輯と記されているところを見るとまだ続編があるのだろうが、いわば宣伝と国威発揚のために御用的に編集されたものであったことは間違いない。小冊子には頁をめくると、「満蒙開拓青少年義勇軍現地訓練所所在地図」が示されており、拓務省移住地に沿って訓練所が国境附近に配置されているのが分かる。ついで、訓練生の日常生活の様子が写真で紹介されている。朝礼、愉快的乗馬、武器の手入れ、軍事教練、建築作業、脱穀、楽しい飯盒炊爨、ハルビン訓練所宿舎、と続き、現地の生活の紹介誌となっている。「凡例」には次のように書かれている。

本冊子は本春以来大陸開拓の歟の戦士として五族協和日満一徳一心の理想顕揚の為勇躍渡満した我が青少年義勇軍諸君が懐かしの郷里に齎した通信を府県に委嘱募集の上輯録したものである。

輯録に際しては能う限り全国各府県出身者のものを登載する予定であったが、刊行の都合上所定期日迄に到着した府県の分の中三十三篇のみを登載することにした。

通信文につきては原文のままとし文字の誤り助詞の誤用等を訂正する程度に止め努めて赤裸々なる現地の姿を紹介することに努めた。

「通信」は北は山形県、南は宮崎県にまで及ぶ。孫呉訓練所所属が4通、寧安訓練所所属が6通、勃利訓練所所属が4通、ハルビン訓練所所属が3通、嫩江訓練所所属が9通、鉄嶺訓練所所属が5通を収めている。ここでは、その中の数篇を紹介しよう（なお表記は現代仮名遣いに改めた）。苦しさのなかにも、「楽土建設」に燃える若人の充実した、清冽な生活ぶりが描かれ、過酷で陰惨な生活の様子は、意図的にと思われるほどに一切排除されている。

楽土の建設 栃木県出身勃利訓練所 高木完治

拝復、過日は種種有難き御手紙下され誠に有難く御礼申し上げます。

御手紙を拝見致しますと課長さんには我々義勇軍の事にて一方ならぬ御心配を致し下されて居る御様子にて我々一同感謝に堪えぬ次第であります。我々一同大陸に到着以来元気益々旺盛にして六、七月頃の百度上下の酷暑も何なく経過致し今日涼しき秋を迎えて毎日朗らかに病人一人なく栃木、茨城斑は我が勃利訓練所中にて第一位の好成績にして義勇軍の重大なる使命

達成の為に邁進致して居ります。他事乍御休心下さい。次に我々の近頃の仕事を少しばかり御知らせ致しましょう。中隊から約七里ばかり山奥に入り見事な大木を切り倒す者が有るかと思えば又一方には近頃の満州の寒さを知らぬかのように裸になって炭焼きをして居る者又一方には馬車に積み込んだ大木の上に乗って歌を歌いながら運搬致して居る者も有ります。実に愉快で有りますよ。又農耕の収穫班等は毎日にこにこしながらさも美味そうに西瓜等をかぶり乍ら働いて居る姿等も又格別で有ります。こうして皆なが毎日毎日朗らかに働いて居ればこそ満洲国が発展し同時に王道楽土も築き上げる事が出来るので有りましょう。我々義勇軍は一日も早く完全なる王道楽土を建設致し、皆様の御恩の万分の一にも報いる覚悟で有ります。

最後に我々一同北満の一角より皆々様の御健康と御幸多福を御祈り申し上げます。

がっちりと手をとって 山梨県出身 寧安訓練所 井上敬之

拝啓、入植以来御無沙汰致しました。懐かしい甲斐の山河にもすがすがしい夏が訪れて来た事でしょう。皆様方には夫々自己の産業の道に御精進され居る事と拝察致します。此方満州の曠野、沙蘭鎮の原頭にも短い春から夏にと移り、所々に生えている大きな潤葉樹も青い芽を吹いたかと思うと二三日にしてもうゆらゆらした葉陰を作って夏になりました。何も見るべきものもない殺風景な野原も何時か真青な草原と変わり、内地では春の訪れを想わせるような小さな美しい花が咲いています。そしてその上をそよそよと初夏の快い風が吹いています。

次に義勇軍の一日の生活を簡単に御知らせ致しましょう。午前五時、広原の静寂を破って喇叭と響き渡る喇叭の音に若き少年の夢は破られて忽ちはね起きて、直ちにゲートルをつけて夜具をきちんと全部揃えてたたみ、洗顔が終わる頃点呼の喇叭が又響きます。全部整列して遥か祖国日本に向かって、国歌合唱と同時に日満両国旗がサラサラと心良い風に煽られながら揚って行きます。丁度その頃東の丘から真紅の太陽が上がって来ます。その時は何んとも云えない荘厳な気分打たれます。

勅語奉読が終って「」を声限り呼びます。その声は遮るものの無い曠野を何処までも響いて行きます。直ぐ続いて一時間の食前作業みっちり汗を流して充分腹を空かして彼等は「戴きます」と声より早く箸を握っています。後は喧しい食器の音のみしばらく無言...

こうして若き少年達は大陸にガッチリと植えられスクスクと育って行きます。(中略)私達もこの大使命遂行の為に全力を挙げて働きます。この満州と山梨とガッチリと手に手を取って互いに一体となり、大理想の為に一身を捧げようではありませんか。

聞け！黎明の鐘を、行け大陸へ。大和民族の大行進へ続け。

かの大陸へ 義勇軍は其の先頭なのだ かの大陸へ 大和心を植えることこそ我等日本男児の本懐ではないか 目覚めよ青年！ 東亜の黎明の鐘に

大陸は精神修養の道場 奈良県出身 哈爾濱訓練所 三島全一

拝復、御手紙有り難く御礼申し上げます。

さて第三回義勇軍も無事七月十五日に内原訓練所に入所致されし衷心より御喜び申し上げます。私も七月一日現地に入植以来ずっと運転練習に従事し今では開墾を一生懸命にして居ます。今からがトラクター班の繁忙期でして十一時頃迄仕事をする事が有るとの事です。日の出に起床し大陸の冷たい空気を胸一杯に吸い込み清浄な気持ちで弥栄を三唱する若人の脳裏に響くものは専心報国の一念だけです。(中略)

今や日ソの国交急を告げ、越境問題続発！国論一致超非常時の時に当り満蒙開拓の鋤鋤を取りて満州建国の聖業に参加するの意義は実に広大無辺軍隊にも次ぐべきものでなくて何であろうか。(中略)大自然に全生命を捧げて働く我々、笑い合って働く我々の曠野は精神修養の大道場です。若人よ立て！と呼びかけざるを得ません。同県人の一人も多く渡満されん日を指折り数えて御待ち致して居ります。

昭和十三年八月十八日

東洋平和の礎たれ 香川県出身 勃利訓練所 綾野正信

青年義勇軍通信

拝啓、小生出発以来郷里には別に変わった事は御座いませんか。小生は相変わらず元気潑刺として北満開拓の使命を全うしつつありますから他事乍御放念下さい。

降って小生は第二次先遣隊として義勇軍の一員として北満開拓の重大任務を担って四月中旬渡満致しました。池西村出身の一青年であります。住み慣れし香川県を後に内原の内地訓練所に入所した時は未だ寒い二月の下旬でありました。

あの寒さと闘って内原での訓練二カ月も無事終って四月十六日福井県の敦賀港にて内地と最後の別れを告げ我々の目指す北満にと向った。そして十八日午前六時清津港に大陸第一歩を踏んだわけであります。

それより一昼夜目的地勃利に向って汽車は驀進して行くのであります。車窓より外を眺むれば見る物すべてが珍しいものばかりでありました。広々とした曠野で地平線が出来たかと思うと次は小高い丘となり地形も色々に変って行きます。

愈々現地の土を踏んだ時は何だか強い強い決心が湧き上がって参りました。北満の四月と云っても内地の二、三月頃の気候にて長い冬の眠りから醒めようとしている所でした。それが五月になり春の風が吹く頃となればすべての草木は我先にと若芽を出して参ります。北満は自分等の想像だにも及ばなかった現実の姿です。内地にて五反や六反の田圃をしているのを眺める時にはこれから先が思いやられてなりません。

だから若い青少年達はこの広々とした然も地味肥沃なる北満に渡って未開の土地を開拓するのが我々青年に与えられた使命ではないかと僕は信じて止まない。(中略)

時折思い出す事はあの出発の時官民多数御見送り下さいましたあの時の万歳の声です。あの声は僕等を如何に勇気付け又印象に残した事でありましょう。男子と生まれて此れほど喜ばしい事が他にあるでありましょうか。狭い農村に若い青年が多数苦しんでいるよりこの広い北満に來たりて第二の日本建設と王道樂土を作り上げ以って東洋永遠の平和を作ろうではありませんか。だから今後益々若い青少年に呼びかけ北満開拓の戦士をどしどし御送り下さい。草々

青少年たちは「太陽の如く」「楽しい作業」に取り組み、元気に「トーピーズ（四角の石煉瓦）作り」に、またトラクターに乗って「樂土の建設」に勤しむ。夏には「肌は赤銅色」に焼け、冬には「吹雪を衝いて」「沃野に立つ」のだ。彼等の心を和ませるものは、「春爛漫の草原」や「真紅の太陽」ではあったが、「民族移動の前衛」も当初の「開拓者の感激」は「大陸は精神修養の道場」と言わせしめ、「東洋平和の礎」となり「満洲の土とならん」ために「月光下の歩哨」にも耐え、譬え「国策の捨て石」となり、「満洲の露と消ゆとも」、「十年後を期して」「瑞穂の国はウラルの麓」と、夢見るのであった^{注8}。

そして、手記の最後には殆どと言っていいほど、「我に続いて満洲に來れ」という言葉で締め括られている。当時の厳しい検閲の中、現実の過酷な描写、赤裸々な体験は総て削除された。彼等は次のように内地の若者に呼びかけることで、自らの生活の孤独を紛らわし、日々の作業の正当性や士気をさらに高めようとしたのではないだろうか。

内地農村に居る限り春秋に富む青少年には、決して明るい前途はないと私は思う。農村の青少年は手には鋤を握っている。然も大地に足はついて居ない都会の人はハンマーを振り上げているけれども将来の不安におさえつけられている。

私は云う。來給え満蒙の新天地へ。そして仲良く王道樂土建設に邁進しようではないか。待っている。満蒙の未開の沃野は君達の渡満を予期して待っているのだ。

また、彼らは寂しさに耐えきれない心情を、望郷の思いを、詩歌や創作に託すこともあった。福田清人の紹介する「義勇隊の文学」から、そのいくつかを拾ってみよう^{注9}。

福田は農村建設に伴う文学の新しい胎動に、新しい大陸文学の地盤としての意義を見出そうとした。士気を高め、純真な訓練生の明日への希望をもたせる心の昂揚をそこに汲み取ろうとしたのである。ある訓練所には「文化部」があり、「文学部」があった。建国精神を基調とした、東亜新秩序建設のための開拓地文学が奨励され、彼らの作品は訓練部本部の刊行物『開拓青年』、満鉄移住協会の『開拓』などの投稿欄に掲載された。その中には報告文学の菅野正男『土と戦う』、星野吉朗『荒野に歌ふ』の歌集などがあった。

次にあげるのは、「義勇隊文学」の短歌のいくつかである。

益荒夫の 血潮に染めし 満洲の 土一握も おろそかならず
天つ日の 真下にありて 世を創む 少年われらの 眸は燃えて
くにを出て 三とせなるかも 初日の出 希望大きく 拝む我は

日常の訓練生活以外に、家族や望郷の念を素直に歌ったものはとりわけ胸をうつ。

母子雲 いづこへ行くか 故里の 老ひたる母の 姿浮ぶも
うす藍の 花咲きさかる この丘は 母の羽織の 柄に似てあり

俳句もまた、自然や人生の観照として、彼等の生活のくつろぎ、慰藉となりえた。

日満旗 上げて春風に なびかしむ
故郷は 遠し灼けつく 夏の雲
野火迅し 馬の白骨 など残し
つはものを 送る宴や 夜の吹雪

こうした牧歌的な風景の裏にどのような過酷な生活があったのかは、こうした記録からはほとんど伝わっては来ない。実際は空前絶後の荒涼とした日々があった。

伍. 曠野の現実（その2）—精神破壊の日々—

過酷な日常は生活全般に見られたが、とりわけ、「王道楽土」と信じて渡満した地が待ちうけていたのは、匪賊に脅える矛盾した現実であった。凍結期の歩哨、立哨は体力と精神の限界を超えるものであった。現地の青少年の生活記を収録した『満洲国の私たち』（昭和17年）という文集には、匪賊に脅える訓練所生活の緊張を描いた作文がある。匪賊とは日本側、「満洲国」側の呼称で、つまり反日反満武装勢力である^{注10}。

特別警備の一日 青年義勇隊一面波特別訓練所 佐々木靖 二十歳

十二月廿八日。この日は我々にとって一生忘れることの出来ぬ日だ。それは我々が渡満して、始めて匪賊が入った日だ。夜の点呼礼拝も済んで雑談に華を咲かせていた時、突然喇叭が鳴り出した。「おやッ消灯にしては変だなァ」と思っていると、「非常呼集だッ」という。「スハッ」とゲートルを巻き、銃を持って飛び出すと、早い者はもう並んでいる。次から次と、飛び出して来る。小林中隊でも非常呼集が鳴っている。集合も終わった。小隊長の小さな声でする号令は聞き取れぬ位だ。先頭の方から顔と顔とを合わせるようにして番号がかかって来た。（中略）

私は残念ながら来週の当番が理由ではねられた。あたりはしーんと静まり返っている。無気

味な静けさだ。選抜された人々は小隊に帰って、防寒外套を着て、銃も俄連式を持って集まって来た。残された者は全部残念そうな顔をしていた。

「出発だッ」私達残された者は小さくではあるが、力の籠った声で、「元気でやれ、匪賊の弾丸でなんか死ぬなよ」と言ってやった。選抜された拓友は、喜んで出発した。

小隊長は正副共殆どが行ってしまった。(以下略)

(165-174頁)

ここには、緊張した「出勤」の様子が描かれている。「我等義勇隊は戦いを好むものではないが、時と場合によっては銃をとって立つ事もある」のだ。警邏のあと、何事も無く宿舎に帰る途中、「彼方此方に満人の嬉しそうな顔が見える」。「十分我々に好意を持っているらしい」と感じる一方で、不安な夜は続くのである。

だが、現地訓練所での生活の実態はこうした本人の手記からだけでは伝わって来ない。そこにはどうしても故意の「脚色」や強制的な「隠蔽」が見え隠れする。一方、前述の小林秀雄の次のような視察記を読み進むと、凄惨とも思える情景描写が胸をうつ。

... 十数人の少年が一緒に乗っていたが、そのうちの数人がしきりに寒がっているのを憂だ
なと思ったが、防寒外套、防寒靴は無論の事、シャツ、靴下類に至るまで、少年達への配給準
備はまことに不十分なものである事を後で知った。... やがて訓練所の本部に着いた。夕暮れ
は迫っていた。白い地平線から吹いて来る寒風に曝されて、一塊のみすぼらしい家屋が並んで
いるのを見た時、僕は、千四百人の少年が、ここで冬を過ごすとはどういう事であるかを理解
した。それは本の統計にも説明にも書いてない事であった。いや、恐らく幹部の人達も此方へ
来てはじめてそれを理解したであろう。所長は不在であったが、僕の会った幹部の指導者達に、
満州生活の経験者と呼んで差支えないと感じた人を見付け出す事は出来なかった。この新しい
仕事には、皆言わば素人だった。... (傍点、引用者)

あるいは、佐藤福都『北満の青春』には、義勇軍の実態が赤裸々に記されている。

十四歳の少年時代から戦争の教育を受け、憧れと先導者の勧めにより、希望に満ちて、満蒙
開拓義勇軍の先駆者として現地に来て、明けても暮れても厳しい訓練と重労働の連続ではない
か。未だ甘えたい盛りの幼気な少年を、堅い枠に嵌め込み、精神教育を詰め込み、残酷な労働
を強制するとは、育ち盛りの人間に自由の束縛である。

朝造りに三百メートルもある船着き場から木材を担がないと朝食をやらない、過酷なる仕打
ち。いくら戦時下の国策とはいえ、軍閥を恨みたい気持ちが込み上げて来る。

当時は大声では言えないのだ。

満人苦力同様重労働を強いられ、粟や高粱なんか食わされ、凍結期の中で堪え忍ぶ少年たち

の心境、いかばかりか言語に絶する。(後略)(67-68頁)

唱導者の口車に乗せられ、「満洲」がどんな風土で過酷な荒涼地であるのかも知らないまま、「王道楽土が待っている」、「狭い日本より、俺も行くから君も行け」の唄い文句に乗って来たが最後、引き返すことはできない。戦時下の子供達は国家のためならば命を捧げることを当然のように教育されてきた。したがって、義勇軍になるのは名誉なことであった。内原で拓土の精神を植え付けられ、夢を抱いて渡満する。「若者よ、大地に生きよ、アジアを興す原動力だ」という掛け声は原野を切り拓く前に、少年の心を切り裂いていったのである。

前述写真集の中に「屯墾病」と題した写真が数葉がある。「屯墾病」とはホームシックのことだが、単なるホームシックでなかったことは、当地の過酷な自然環境の中で破壊されていく精神、肉体の限界をすでに物語っているのである。「宿舍の片隅に作られた故里の神社の模型」「首を長くして待ちわびる郵便車」、それらの一つ一つの光景が、国家に欺かれた人民の孤絶した感情と、そして人間を人間として扱わなかったファシズム国家の原形を鮮烈に示しているのである。

義勇軍の使命も時局の推移とともに軍事色を強めていくことになる。康德10年(昭和18年、1943年)には、次のような「重大使命」に変容している注11)。(傍点部分、引用者)

義勇隊は実にかくの如き重大使命を、主として農という職域を通じて達成せんとする拓士としての資質を育成訓練するのである。即ち義勇隊の指導原理は農を中心として左の如く軍事、産業、教育の三位を渾然一体的に総合して指導鍊成するにある。

- 一、軍事能力を涵養し、国防力を強化し、
- 二、拓士としての訓練を施し、生産各部門特に農産部門を分担し、
- 三、国家生活に即したる教学を実施する。

つまり、「農」を主としながらも、ここには「軍事」的な要請の高さが、明確に掲げられているのである。

六. 曠野の現実(その3) 一破局への予兆のなかで一

現地で義勇軍を待ちうけていたのは想像を絶する生活の困窮であったことは先にも述べたが、彼らは徐々に移民が国家の「棄民」であったことを悟らされることになる。やがて、現地住民との軋轢、摩擦を生み、さらに暴行、物資掠奪行為などへと拡大していく注12)。

これまで、義勇軍は現地住民との衝突はなく、まして暴行、物資の掠奪などはなかった、という見解があり、そのことも義勇軍の本質を閉ざしているが、果たして実態はどうであったか。ここでは、二種類の史料を紹介して真実に迫ってみたい。

昭和16年2月20日と日付のある「民心離反情況調書」という70頁ほどの冊子がある。錦洲憲兵

隊の作成によるもので、第3章の第2節「開拓」の「開拓民に対する動向」の中に、「開拓団員の非行状況」として義勇軍の非行が記されている。(引用にあたっては一部を現代語表記に改めた)

入植当初は所謂鉄の戦士として歓迎しありたるも幹部以下の素質不良と非行の屢積に因り、漸次嫌悪視するの傾向あり。速やかに之が資質向上の為適切なる施策の要あるを痛感せらる。

「幹部以下」とあれば、幹部もその団員も等しく、ということであろう。「素質不良」と度重なる「非行」の具体的な実態は記されてはいないけれども、当初の評価が失墜しているさまが明記されている。「嫌悪視」され始めた端緒の実態は果たして何だったのだろうか。この「要旨」に続いて「動向」が記される。

一、開拓団員の非行状況

昨年後半期以降において、幹部の指導統御力の欠如よりする幹部に対する訓練生の当
與暴行事件一件、及び訓練生生徒間の紛争事件二件ありたる外、労苦を厭い逃走するもの附近部落民に対して暴行頻発しあるに因り、輦蹙を招来しあり。

二、綏中義勇団入植当時は同地国婦において月一、二回の慰問を為しありたるも非行の続発に依り、之を嫌忌、昨年八月頃より慰問を停止せり。

三、言動

○義勇団は国策団体なりとの誤れる優越感より満人を殴打暴行する等、全く日本人の信用を落せり。綏中日人商人

○開拓団幹部には団員よりも素質低下せる者を散見す。開拓団の発展向上の為には先ず幹部教育の徹底を期し、団員並びに住民より真に尊敬さるる人格者を要望す。

○団員は年少の関係上漫然渡満した者多く、望郷並びに寂寥感等より開拓団員なりとの自負心を欠き、度々不祥事件等起き、住民の嫌忌乃至は離反を招来しあり。将来嚴重なる監督、指導を要す。(満炭殖産係員)

以上は、日本人(満炭殖産係員)の見た義勇軍訓練生の実態である。訓練生の持つ優越感は理想とする「王道楽土」、「五族協和」の実現とはほど遠いものであった。一方、満人(当時の中国人をこう称した)から見た開拓団、義勇軍訓練生の実情ではさらに横暴を極めるありさまが記されている。「要旨」には、次のように書かれている。

開拓民は我々の土地を奪い、剩え、満人を蔑視し殴打暴行を為す等、民族協和の破壊者なりと極度に嫌忌し開拓団に対し相当民心離反しあるを窺知せられ注意を要す。

ここでは開拓民は「民族協和の破壊者」と断定されているのである。次の「動向」では具体的な

諸例が現地住民によって挙げられている。

一、綏中開拓義勇団員にして、

○附近満人部落において主人留守中満人娘に悪戯暴行。

○部落民と飼犬を殺傷。

○満人の訓練所用地において草筆りしあるを捕縛殴打し、満人より警察に訴えられたる事例あり。

二、言動

○義勇隊は実に横暴だ。些細なことでも直ぐ殴打暴行する。全く満人を奴隷視しありて民族協和の破壊者なり。(警察官一)

○我々の土地を奪い乱行の限りを尽くしあり、全く日本人の為に安心して仕事も出来ぬ。
(綏中県住民)

○開拓民を見れば日本人の本当の姿が解る。内地では皆開拓民のような気持ちを以って満洲を見ているであろう。

現地住民に対する暴行、非行はさらに日常的であったと察せられる。訓練生らの荒んだ生活のはけ口が住民に対する襲撃、物品の集団収奪であった。「五族協和」、「王道楽土」はすでに虚栄の美辞麗句でしかなかったのである。また、強烈な皇国精神のみを叩き込まれた青少年達には、他民族を敬うなどの異文化間理解の教育は十全に施されておらず、むしろ他民族への優越感、差別感のみを醸成していったことがうかがわれる。「五族」のリーダーであるはずの日本人は地に堕ち、「協和」の破壊者として嫌悪感、敵対感を増殖させていくのである。

在満諸民族の共存共栄を掲げ、楽土を実現させるはずの移民政策は悲惨な破局の序章でもあった。長年の血と汗の結晶である開墾された土地を奪われ、行くあてもなく厳寒の地に家屋からも追い出される中国人、朝鮮人農民。一方の開拓移民は、日本国内の経済矛盾を背負わされ、国防の一翼を担わされた存在であった。矛盾は解決されるはずもなく、国外に矛盾を輸出して中国人・朝鮮人農民と日本人開拓移民との矛盾を増幅させたにすぎなかった。開拓移民も「国策によって加害者となるべく運命づけられたという意味での被害者であったというべきかもしれない」のである^{注13)}。

また、先ごろ発見された「満洲国」関東憲兵隊検閲史料によれば、統制下「満洲国」の生活の現実がつづられており、開拓団の悲劇が家族、親戚、友人関係にあてた手紙類のなかに如実に記されている。

「移民団と言うものは内地の新聞や雑誌などで大変評判よく宣伝して居りますが、実のところそうではないのです。可愛相なものですよ。まるで満人のような汚い風をして朝早くから晩

遅くまで畑を耕し一年中こんなことばかりで楽しみというものはないのです…。聞いて極楽見て地獄とはこのことでしょう。…」

「移民などに来るものではない。其の生活にどんな苦勞をしているか判らない。活動写真などでは立派なことを… ているがまるで反対だ。義勇少年隊送りは実に可哀相なものだ。現下、満洲国防止上多数の移民を必要としている折柄、うんと宣伝をして大陸強化を計るためだ。余り宣伝に乗らないよう特に注意されたい」 (原文カタカナ書きの部分は平仮名に改めた)

くれぐれも宣伝に乗らないようにとの「忠告」は、実際の訓練、開拓生活の過酷さを物語っている。厳しい検閲があるので、実際の生活の真実はほとんど「内地」には届きにくかったものの、民衆の生活は物質的にも精神的にも底をついていたことは歴然としている。

また、被差別部落出身の移民も渡満すれば差別は解消されると思っていたのが、実際はさまざまな形で差別を背負うことになったことが、高橋幸春『絶望の移民史—満州に送られた被差別部落の記録』(1995) などによって明らかにされている。「狭い日本にゃ住み飽きた」一種の投げやりな気分もまじえながら、「草木もなびく」ように渡満した背景には、移住関連会社の過当競争などもあり、マインドコントロールのようにそれを煽った教育界やマスコミの功罪もまた甚大であったのである。

七. 戦時下青少年ファシズム教育の頂点

「義勇」とは「正義と勇気」、「正義を愛する心から起きる勇気」「進んで公共のために力を尽すこと」(広辞苑第五版1998)を意味する。「義勇」とは「自ら進んで一身を国や社会のために犠牲にすること」(新明解国語辞典第五版1997)であって、「国の犠牲となる」ことは男子の本懐とされたのである。そして、「義勇軍」は、「戦争、事変に際し、有志人民が自ら組織、編成した戦闘部隊」(同)である。あるいはあえて補足するならば、戦時に際し、自らの意志により軍事行動に参加する正規の軍人でない兵士、である。義勇軍は最初から拓士として開拓移民という国策と補充兵力という戦力を兼備した組織として誕生したのであった。「奉仕」の名のもとに行われた「天皇赤子」の供出にほかならない。

だが、この「義勇」という美名は戦時、一貫して用いられた国家精神総動員運動の支柱であった。本土決戦に際しての「勤皇学徒報国隊」や「女子挺身隊」などのほかに、「国民義勇隊」「義勇戦闘隊」などの組織化がそれである。「国民義勇隊」は、働ける国民層男女一般人を陸海軍と一体化し、挙国一致して本土防衛に当ろうとする体制作りであった。国民学校初等科卒業以上の者で、男子は65歳以下、女子は45歳以下の者とした。閣議決定は1945年3月23日であった。さらに「義勇戦闘隊」の兵役法が同年6月23日に施行される。「国民義勇隊」は「隊員各自の旺盛な皇国護持の精神のもとに、そのおのおのの職務を全うしながら、戦局の要請に応じて、防空、防衛、

空襲による被害復旧、陸海軍の作戦部隊の行動の補佐、武装隊の組織など」を主眼とし、「義勇戦闘隊」は「主として作戦が要望する生産輸送、築城、防空、復旧、救護などの兵站的諸業務に服し、作戦警備を容易にすること」を主眼とした。ごく一部を除いては全国発動されることなく終結を迎えたものの、これらは国体護持のための紛れもない戦時下ファシズム教育の典型であったと言わなければならない。そして、これら「一億総特攻」の原型がすでに義勇軍の生成において、原初の形態、萌芽的な指向として看取されるのである^{注14)}。

そして、無垢な青少年たちを戦場に駆り立てたものの大きな力には「教育」があった。教師の戦争責任は文化工作者の戦争協力ほどには認識されていないが、義勇軍を送り出しに教師の力が大きく介入していたことは拭いがたい事実である。また、満洲国が総動員帝国と称されるように、帝国の野望を遂行せしめるには手段を選ばない冷酷無比の時代状況が明らかに読み取れるのである。義勇軍はその意味で二重の犠牲者であった。すなわち、国家に動員された被害者として。またかの満洲国においては現地住民を搾取し、侵略に荷担した加害者として。—そこには、何よりも戦争による教育の荒廃があった。

義勇軍誕生の背景には総力戦に備えての天皇制教育の浸透があったことを再度確認したい。

1937年5月に文部省から『国体の本義』が出版されるや、民主主義、自由主義などの欧米思想の根幹にある個人思想を排し、天皇への「絶対随順」「没我帰一」が説かれることになる。「大日本帝国は万系一世の天皇皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ、我が万古不易の国体である。而してこの大義に基づき、一大家族国家として億兆一心聖旨を奉体して、克く忠孝の美德を発揮する。これ、我が国体の精華とするところである」という、天皇を絶対とする日本主義国体論が、唯一の国家公認の思想となったのである。同年、7月に勃発する日中戦争を見越しての精神的「国策」であった。戦局の拡大は、軍事力（兵員）増力の必然性を招き、その要員たる人的資源としての青少年に対する期待は日増しに強くなっていったのである。

1937年9月、日中戦争をきっかけに「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」をスローガンとする国家精神総動員運動（精動運動）が展開され、教育も戦時色一色に染め上げられていく。「国体の本義」に基づく教学の刷新が競うようにして各地に浸透し、忠君愛国、敬神崇祖、感恩報謝の至情が「涵養」された。師道が叫ばれ、学校は日本精神の体現のための「道場」とされたのである。

そして1939年5月29日の昭和天皇による「青少年学徒ニ賜リタル勅語」こそが、最も強烈に青少年たちの心を天皇に向かわしめたのであった。国家隆盛の任務は「実ニ繋リテ汝等青少年学徒ノ双肩ニ在リ」としたこの勅語は青少年学徒に対する直接的な「勅語」という点において、明治天皇の軍人勅諭（1882）にも匹敵する、はかりしれない衝撃を与えたのであった。「文を修め武を錬り、質実剛健の気風を振励」することを強要する、上からの唱導の結果、教育は銃後の国家精神的な錬成道場と化していった。義勇軍の生成を考えると、この勅語がいかに青少年をして戦争に向かわしめたのか、その歴史的な評価とともに受容の事実解明こそが肝要であろう。戦時下ファシズム青少年教育、天皇制軍国主義教育の荒廃の頂点として、義勇軍の史実は長く後世に記

憶されなければならない。

八. 中国における「義勇軍」の歴史的位置付け

これまで、義勇軍の歴史的な位置付けのためには、「感情の記憶」だけではなく、客観的な史実としての「記録」が重要なこと、そしてその事実こそが将来への歴史的教訓として生かされることを述べてきた。とりわけ義勇軍の中国における評価を経ずしては一面的な理解認識にとどまることになる。ここでは最近の中国における「義勇軍」の位置付けについて概観しておきたい。

中国では「満洲国」を「偽満」と称し、徹底して「満洲国」という名称を使用することは、括弧付きにせよ、タブー視されている。また、「建国」から敗戦による「滅亡」までを「淪陷十四年史」と位置付ける。その期間はどのような美辞麗句をもって帝国の侵略の正当性を主張しようとも、被占領地の人民にとっては屈辱と汚名の十四年でしかなかった。戦後、半世紀が経過しようとするころ、中国ではあらためてこの「十四年史」の再検証が着手された。その背景にはさまざまな一次史料が発見されたこと、日中歴史研究の交流が結実しつつあること、また、最近の日本の反動的な潮流に対する懸念から、周恩来の「前事不忘，後事之師」（前の経験を忘れず後の教訓とする）の精神をもって、かつての戦争被害を喚起させ、もって国防、平和への警鐘とするためであった。

中国においては日本の中国大陸侵略は三大特徴として位置付けられる。物理的空間としての領土的侵略，経済物資資源の侵略，さらに思想・教育・文化の侵略である。「中国東北淪陷十四年史」研究の有する範囲はこうした特徴をさらに尖鋭化させるもので、具体的には、「七三一部隊」の細菌戦，毒ガス戦の実態解明，国境要塞の築城と強制連行された勞工の問題，経済物資の掠奪，資源の掠奪破壊，皇道主義思想教育や日本語教育をはじめとする奴隷化教育など，広大にわたり，それぞれが重大な問題をはらんでいる。「開拓移民」問題は領土的侵略の最も顕著な研究課題の一つで，同時に被害の実情の解明と共に反満反日の人民抵抗運動の一貫としても研究されてきた。研究前史としての1980年以前の中国の「満洲国」検証は姜念東他『偽満洲国史』に集約されているが，その中で，義勇軍は「一般開拓移民の補助的要員としてのみならず，軍事上の意味を重視した」ことをとりあげ，「日本侵略軍の兵力供給として，鉄道，軍用施設の防衛，中国人民反抗闘争を鎮圧する部隊勢力であり，軍事侵略的意図は十分に明白」であるとしている（343-344頁）。

その中心的成果である『中国東北淪陷十四年史綱要』では「武装移民」「二十年百万戸移計画の制定」「大規模な東北移民」がやがて，「戦時緊急開拓政策」へと「変容」し，「日本移民政策の破綻」が導かれている。さらに，『苦難と闘争十四年』では，初期段階として「武装移民の侵入」による「移民事業の掠奪」と「農民の反抗闘争」が主要テーマとなり，さらに第二段階として，大規模な移民策が「二十年百万戸移民計画」「満洲移民政策」が「国策」として採用され，「第二次移民会議と関東軍の満洲農業移民百万戸移住計画案」が着手されるや，「満洲移民第一期実施計画要綱」にそって展開されるようになる。次第に移民機構も強化され，「満拓公社」の土地掠奪が顕

著になる。「分村分郷」移民運動も広範に展開されるようになる。第三段階では、移民侵略の「最高法典」とされる「満洲開拓政策基本要綱」の制定によって、より移民機構の制定と移民法規の徹底が図られるようになる。そこに加わったのが「満蒙開拓青少年義勇軍」の編成であった。

『苦難と闘争十四年』では「義勇軍」の政策確定の背景を詳述、募集と訓練の実態を紹介、現地での「屯墾病の蔓延が中国人犯罪の多発」を産んだ事実を挙げるとともに、その軍事的意義についても詳しく述べている。第四段階では「偽満末期の移民」が「満洲開拓第二期五ヵ年計画要綱」に沿って展開し、「戦時緊急開拓政策」として軍事戦略のなかに組み込まれて行く過程を述べている。さらに最後は「農民の土地掠奪」「農民の離散、離郷」「移民の当地農民の搾取、抑圧」がより顕著となっていく実態を描き出している。

また、最近では高樂才『日本“満洲移民”研究』において、「義勇軍」の実態が最も詳細に記述されており、移民開拓団の中核的機能を担ったことが強調されている。とりわけ、日本移民による用地掠奪、危害と経営について、多くの紙面が費やされている。高樂才の研究は中国における「偽満移民政策」に関する今日的到達点を示すものである。

このほか1996年以来、東北淪陷十四年史編纂委員会（吉林省社会科学院）が編集する季刊誌『東北淪陷十四年史』にも個別的なテーマで移民侵略政策に関する論文が陸続と発表されているが、詳細については省略する。

九. いま、なぜ満蒙開拓青少年義勇軍か

かつて日本が大战に突入した最大の要因は資源の確保であった。近代国家として立国するためには「バスに乗り遅れるな」との戦時下緊迫化のもと、北の満洲の資源と南方の油田の確保が喫緊の戦略目標であった。「アジアの解放」、「東亜新秩序建設」の建前にはアジア人の尊厳や共鳴よりも、莫大な天然資源の略奪という本音があった。朝鮮、台湾を領有化し、中国へ武力進出を続ける日本の掲げた「解放」はすでにアジアの民衆には行動と矛盾する不信感を植え付けずにはおかなかった。自己の身の丈を忘れたときから、武力では人心まで占領できないことを証明していた。にもかかわらず、捨て石のように送り出されていった義勇軍の末路はあまりに凄惨であった。病死、飢餓死をも含め、それはまぎれもなく、「強制された死」であった。それにしても、義勇軍のほかにも十五歳前後の青少年を国境近くの戦線に「奉仕」と偽って張り付かされた悲劇もまた痛ましい。彼らは戦争が終わっても日本の国家、軍にも見放されたのである。

館長の黒澤毅一氏の説明の中で印象に残ったのは「彼ら義勇軍は侵略と知って趣いたのではない」、「当時の歴史についてはいろいろな見方があるが、かの地での真実は行った者でしか分からない」といった感慨であった。確かに実際に経験した身でなければ、千言万語を費やしても真実は語り尽くせないであろう。だが、そうした感慨はともすると、喪われた過去を闇に閉ざしてしまうことにもなりかねない^{注15)}。

天皇帰一に実現される加藤完治の農本主義思想は一種の宗教がかった国民錬成の典型であり、

その精神指導の下に一大運動が展開されたのである。もとはといえば平和的建設に聞こえはするが、加藤は軍部にたより逆に軍部に好きなように利用された結果となった。満洲開拓は軍事最優先で、これを仮想敵国の「北辺鎮護」の兵站基地とするためには、生死を賭してでも押し進める必要があった。目的、理想遂行のためならば、狂気的手段も選ばずで、時の体制は協力を絶対服従として強いたのである。

ここから被害と加害の齟齬が生じる。開拓団に入植した日本の農民は、「五族協和」、「王道樂土」の建設の忠実な実践者であり、銃後の尖兵であった。だから彼等の心情には侵略して搾取しようというなどの意識はなかった、というのである。それは果たして真実であろうか。現実の様々な「矛盾」や「衝突」は、前述の資料などによって明らかに知ることが出来る。また、一ここが、最も重要な論点であるが一、義勇軍にしろ、開拓民にしろ、本当の意味での満蒙開拓を「忠実に」実践したのであったならば、ソ連軍侵攻時に乗じて、真っ先に中国人の襲撃を受けることはなかったかもしれないし、あるいは日本の敗戦後も残り得たかもしれないのである。中国人農民が長年苦勞して築き上げてきた農地（既耕地）を後から来て無慈悲に「横取り」という、暴力的な、非道德的な行為、そして襲奪、強奪、掠奪、など「奪」の限りを尽した行為の結末は、自らの破綻、破滅とそこからの逃亡しかなかったのである。

開拓民にとっては、現実と理想の矛盾した状況に強制的に置かれていたのも事実であろう。青少年義勇軍にしても然り、ただその断末魔の最期を悼んでやまない。戦争という時代が個人を呪縛し、束縛した。だから、義勇軍は被害者だ、とも言いきれない。戦後、いまなおこれらの人々に「被害者意識」が強く、「加害者意識」が薄いのはこういうところから生まれている。彼等の心情では侵略の手先と言われることは心外なのである。義勇軍はさらに被害者そのものである。この罪は彼等に帰せられるのではなく、送出した組織体制、さらに統括した当時の政府施策者たちの野望である。それを清算しない限り、義勇軍の歴史的 position は曖昧なままに続くであろう。

私達は何よりも青少年を義勇軍という美名にしたてた国家権力のファシズムの実態とその淵源を明確にしなければならない。その努力なくしてはこうした悲劇が再び起こらないという保障は無いのではなからうか。資料館建設はあくまで歴史を客観的に精確に残すことに意義がある。悲惨さを記録し、鎮魂するだけでは、死に追いやられた義勇軍、そして被侵略の側にあった中国民衆の心情にも訴えたことにはならない。当時の苦勞を偲ぶための展示、回顧録に終始するのではなく、未曾有の史実としての客観的な立場からの日中双方の歴史史料の展示を望んでやまない。

昨今、短絡的な復古的思潮のなかで、戦前戦中の教育を称揚し、見直す動きが一部にあり、青少年の「奉仕」活動が議論されることも少なくない。時代こそ違え、そこには国家の教育への介入という予兆をはらんでいる。義勇軍の史実を正しく理解することは、こうした意味においても少しも現代的な意味を失っていないのである。

拾. 民衆の犠牲と国家の責任を問う

水上勉の自伝的小説『瀋陽の月』(新潮社1986)のなかに、つぎのようなくだりがある。

… 満洲移民は、官民あげての国策だったから、いろいろな方法で市中にあぶれた失業人口から募集された。府に職業課が独立し、義勇軍や農業移民の勧誘がはじまるのは昭和八、九年頃かと思う。文部省や農林省と連携がとられ、直接府の職員が、地方の学校や役場に出かけて、小作農業の一家や高等小学校を卒業したばかりの子らを説得して、渡満させるべく、必死になって映画や、パンフレットをもちまわった。ほくもそれをやった。しかし、その学校まわりや、府下の町村役場まわりは書記とか主事補の役目で、ほくは雇いだから下っ端ゆえ「大陸の稲づくり」「内原訓練所だより」(青少年義勇軍養成機関の一つで茨城県下にあり、所長は加藤完治であった)などのフィルムと幕と映写機をかついで出かけてゆき、上司が大陸開拓の必要性について演説するのをわきで聞いてから、映画を公開したあと、募集要項を印刷した書類とか、入団申込書などを露天の机上に置いて、帰りの客を誘い入れる仕事をうけもった。

(11—15頁, 新潮文庫)

当時19歳の作者は学資稼ぎに京都府府庁の「雇職で移民のしごとをし」ていた。つまり、「満洲移民開拓団といたり開拓義勇軍といて、政府が地方自治体に、内容は募集をせきたてていた移民事業の手伝い」であった。府庁には職業課があり、総務局厚生部に属して、内務省の管轄であったが、末端の組織には女中や水商売、さらに芸娼妓の職業紹介所と口入屋があり、さまざまな職にあぶれた人々を周旋、斡旋していた様子が自らの体験にもとづいて書かれている。ここには当時の移民募集の状況が実に克明に描かれている。失業者を送り込んだところで、先に紹介した「関東軍憲兵隊資料」に記録されてあるがごとく、「新国家」を打ち建てる希望も意志も実際は見出しがたかった。個々の人生の「新規巻き直し」に精一杯で、「王道楽土」も「五族協和」の世界も、多くの疲弊した人々の知性にとっては非現実な夢想でしかなかった。

しかし、これほどまでに「政府の力や援助を得て勧誘に走りまわっても、おいそれと青少年が義勇軍に入ってくれるとはきまっていなかった」し、当時は辺境と言われる関西の丹後、丹波の寒村にさえ、年少の労働力はすでに「口入屋に先取りされていた」というなかで、青少年義勇軍の「調達」はかなり厳しい状況下にあったことが察せられる。戦後、義勇軍の存在を肯定的にとらえる歴史言説のなかには、義勇軍が自ら率先して募集に応じたとされるが、この水上勉の作品にあるように、これまでの多くの研究や証言によって、政府が大きく関与したことがあきらかになっている。現実には危険を賭しての入団に際しては非常に集めにくい状況にあったこと、さらに送り出す地方自治体と教師による「青少年集め」にも涙ぐましい努力があったことは想像にかたくない。

そして、矛盾するようであるが、もう一つ見逃せない事実が満洲移民が特別の肯定的な意味合いを持っていたことである。作者（水上勉）は巷に聞いた噂として、次のように述べている。

… 国が満洲に人を送るのは、満洲新帝国との約束でもあるけれど、「王道楽土」の建設ならば、永住する覚悟の人民を送らねばならない。それゆえ満洲国民になるのだから内地にいる者に課せられている兵役義務はなくなる。農業移民でも青少年義勇軍でも、ふつうの民間就職組みでも、召集令に緩和策がとられている、との情報だった。（46-47頁）

つまり、満洲移民はそれがどのような形態を取ろうとも「兵隊のがれ」の抜け穴的な存在であり、「それが本当なら儲け物」という考えも日常的であったことが記されている。しかし、戦時下に甘い抜け道などあるはずもなかった。さらに悲惨な事実、宮尾登美子の『朱夏』（新潮社1985）に描かれているように、内地日本よりも外地満洲のほうが米軍の空襲を受けずにすむということで、戦争末期になってさえも「渡満」が行われていたのである。これは、迫り来る対ソ連戦をにらんだ政府の思惑と符合するものではあった。

それにしても思うのは、日本人の生命観、死生観である。人間を人間として見ず、ひたすら天皇制のもとに殉死するという死生観は大戦中に未曾有の死者を出していることでも世界でも極めて異質な状況を形成してきた。人民の犠牲と国家の責任不在の構図はあまりにも冷酷であり、史実さえも闇に葬り去ろうとする生命軽視の思想は、日本の歴史意識の体質を如実にあらわしていると言えないだろうか。無辜の人民をいとも簡単にコントロールし、その果てに感傷のほかはいささかも国家としてそれらの生命の尊さを内省し得ない体質自身は、戦後半世紀以上が経とうとも一切変わろうとしていないのである^{注16)}。

「満洲国」は、軍事第一に作られた人造国家で、軍事的視点がすべてに優先したことは疑いようのない事実である。満蒙開拓の野望が、満洲国の立国や資源収奪とどのような関係にあったかは、今後の歴史検証によりさらに明らかにされるであろう。

満洲開拓民は文学の世界にも大きな影を落としている。前述の宮尾登美子の『朱夏』や、最近ではなかにし礼の『赤い月』（文藝春秋2001）には自らの体験もふまえて、夢と野望を抱いて渡った開拓民のかりそめの栄華と、その後の悲劇の逃避行が書き記されている。満洲移民は戦後半世紀以上もたちながらも、けっして清算された史実ではなく、多くの人々の心の傷痕として累々と生き続けていることを忘れてはならない。私たちは義勇軍を含めた満洲移民策が戦時下のどのような無謀な「棄民」策として推進されたかを、今こそ総体的に、多角的にとらえなければならぬと思う。

終章. おわりにー「歴史の継承」とは何かー

内原訓練所の見学の後、私は日本農業実践学園を歩いた。その前身は加藤完治の設立した日本

国民高等学校。今も、満蒙開拓の生き血が脈々と流れているのである。白昼の汗ばむ陽光を浴びて、いまにも鋤をかついで歩き出そうとする農民服姿の加藤完治の立派な銅像があった。かたわらには、学園の沿革が礎石に掘りこまれている。しかしその説明の中には尊い生命を犠牲にした史実もなければ、侵略の二文字も当然のようにない^{注17)}。

私たちの母校であるこの学園は昭和二年、日本国民高等学校という名のもとに、茨城県宍戸町友部に創設され、のちここ内原の地に移転した。爾来六十有五年、その名称は時代の変遷と共に、日本高等国民学校、日本農業実践大学校、日本農業実践学園と改称されたが、教育の基本は師弟同行、全寮制を根幹とした実践教育の下に一貫して継承されている。

この間、時には苦難に遭遇する時期もあったが、私共は親とも慕う加藤完治先生をはじめ、歴代校長のほか、多くの先生方の率先垂範による真剣なご指導を受けて進むべき道を教えられ、今日まで六千余名の学生がこの学園を巣立ち国内は言うに及ばず、世界の各地において活躍している。

この度、これらの卒業生の同志が創立六十五周年に当り、若かりし頃を偲ぶと共に、先生方への感謝の意を込め、且つ母校の更なる弥栄を祈念し、この碑を建立するものである。

平成五年五月二十八日

同窓会前会長 成田啓五 撰

長方形に長い石碑の表には「日本農業実践学園の沿革」が刻まれているが、大正十四年の設立から今日までの歴史が一望される。義勇軍にかかわる時代の年代記では、

昭和十三年 青少年義勇軍内原訓練所設立に当り、敷地二十七町余歩提供する

昭和十五年 経済統制が開始された為、販売部を解散、学校所在地を内原現在の変更するの件認可さる。

昭和十七年 少年部内原に移転し学校の移転完了。

昭和十八年 農林省の甘藷増産計画に従い、実面積七町歩の苗床に育苗し三百万本の苗を全国に配布、戦後の食糧危機克服に貢献。

昭和二十年 G H Q の調査を受けたが、教育の真意が理解され、学校の存続が確認さる

のような列記にとどまっている。その後ろには社団法人日本国民高等学校協会設立発起人の名簿と「農魂を磨く道の師尊まむこよなく仰ぐ名をば刻して」の詩文と共に歴代の教員の名前が刻まれている。そして、路を隔てた木陰には、加藤完治の詠んだ詩がこれも立派な石碑に刻まれている。

さ一昇る 朝日と共に 鋤とって 磨け益荒夫 やまと魂

今ここに寄居する学生、職員らはこれを日々見てどのような心境なのであろうか。のどかな光景の中に、決して消え去ることのない闇。加藤完治に象徴される、奨励だけしておいて、義勇軍の責任もとることなく戦後も生き抜いた偽善、欺瞞の系譜。——ここにも日本の風土特有の歴史隠蔽があることを感じ取らざるを得なかったのである。

そして「大和魂」はさまざまの「魂」を産み続けた。「農魂」「拓魂」「満鉄魂」…。錬成、陶冶、涵養といった精神性の強い言説は現代語にも身近に見出すことが出来る。

帰りは駅まで歩いた。通りがかった中学校の校庭に久しく見る立派な二宮尊徳の銅像が目にとまった。彼こそ農村復興に立ち上がった純血であった。思えば、古来より日本人は勤勉を民族の誇り、生活の旨としてきた。それがやがて「天皇帰一」のための国民の基礎的「錬成」に統率され、「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」「没我帰一」などのスローガンのもと、「和」としての強固な国体論を形成していくことになった。こうした「忠孝の美德」が勇躍した歴史が、ついこの間の出来事であったことを今、あらためて思い起こさずにはいられない。

歩きながら、この路をどれほどの青少年が悲壮感をもって歩いて行ったのだらうと思うと、胸が重苦しく痛んだ。途中通りかかった地蔵院にも満蒙開拓団の慰霊碑が境内にあって、桜の木に抱かれていた。風雪に耐えた卒塔婆がいまにも崩れ落ちそうであった。

「満蒙開拓殉職者之碑」と刻んだ石碑の隣に「忠魂碑の由来」としてこう記されていた。

忠魂碑は戦争で亡くなった人々の死を悼み、その武功を記念する碑であります。

この碑は昭和四年に、在郷軍人会旧下中妻村分会の主催によって、内原町杉崎の旧下中妻村役場前に建立されたが、昭和二十二年三月二十一日に当地の地蔵院境内に遷され、現在に至っております。

碑には明治二十七～八年の日清戦争から明治三十七～八年の日露戦争、昭和六年の満州事変、昭和十二年からの日中戦争、更に昭和十六～二十年の太平洋戦争において尊い命を祖国のために捧げた旧下中妻村の戦死者（一二一名）及び新たに内原町に居住された遺族の戦没者（五名）の英霊が祀られております。

諸勇士の霊を弔い、再び戦争を繰り返すことのなきよう、世界の恒久平和と幸福を深く念ずるものであります。

平成七年九月三十日 内原町遺族連合会 下中妻遺族分会 東光山地蔵院

ここに、内原を訪れてはじめて「不戦と平和」を希求する言葉に出会ったのである。それにしても、あの夥しい「死」ははたして「殉職」でありえたのだらうかとの思いが過ぎる。

そして地蔵院には「無念仏」も安置されている。朽ちた墓石の傍らには「義勇軍唱歌」を代表する、「われら若き義勇軍」の歌詞とともに、こう記してある。

我等は若き義勇軍
祖国の為ぞ 歟とりて
万里涯なき 野に立たむ
いま開拓の 意気高し 意気高し

平和と勤労を愛し不毛の荒野を拓き五族協和の理想のもとに楽土建設を夢みて大陸に渡り理想の夢が花開くかに見えた矢先のあの大悲劇の中に巻き込まれた満蒙開拓民二十七万有余名の内殉難された八万有余柱の為に昭和二十年元義勇軍発祥の地ここ内原町東光山地蔵院に碑文を元内原訓練所所長加藤完治先生、当時財団法人開拓民援護会により建立される。

奇しくもこの納骨堂には義勇軍拓士で無言の内地上陸するも故郷へ帰山できず、我が内原拓友会が懸命の「ふるさと探し」も可なわなかった四柱が安置合祀されております。どうか全国の今は亡き拓友よ、我が国の平和と繁栄は諸兄の犠牲が礎です。

殉難霊位の御冥福を祈願いたします。合掌。

昭和五十八年十一月 義勇軍内原拓友会建之

桜の花卉がはらはらと風に舞った。無言の死者たちの霊が静かに呼吸をしているようであった。内原という聖地が悲劇の淵源の地であり、終焉の地であったことを心に刻んだ。

このたびの内原探訪では、限られた時間の関係上、義勇軍訓練所河和田分所、満蒙開拓幹部訓練所跡及び指導員養成所跡（いずれも現鰐淵学園）や義勇軍農場跡、弥栄神社、武具池などを見学する余裕がなかったことは心残りであったが、新しい資料館が開設されたときにまた訪れてみようと思う。「歴史の継承」には、必然的に「語り継ぐもの」と「語り継ぐこと」が実在する。前者は歴史を直視する「主体」であり、後者は史実そのものの「客体」である。この「主客」が正面から対峙するところに、歴史の真実は永劫に継承されてゆく。

日本の満洲移民は当面の農村疲弊の救済を名目としながらも極めて軍事的考慮、計算にもとづいた、それだけに精神主義的色彩を濃厚にふくんでいた。その最も典型的な形態が世界史上先例のない、義勇軍としての移民であった。

義勇軍の史実をたどることにより、あらためて戦争の被害と加害の問題をいかに克服すべきかを学ぶことができる。戦争体験の風化とともに、隠された歴史を掘り起こし、戦争とどう向かい合うかが今こそ問われている。歴史の真実を知り被害者の死を悼むと同時に、その歴史の「生成」から「終焉」にいたる慟哭の過程を明らかにし史実を共有する営為こそが、戦争から私たちが学ぶとる、きわめて人間的な体験として未来に継承されてゆくのではないだろうか。そう思いながら、日の暮れかかった内原を後にしたのであった。

(2001.4.10. 内原訪問, 2001.5.31. 脱稿 .2003.9.24. 補稿)

【附記①】

内原を訪れたのは2年前の4月であった。その後、2003年2月に資料館（内原町郷土史義勇軍資料館）も完成したが、「義勇軍」の歴史的評価をめぐる議論はその後、顕著な展開を見せていないように思われる。ここに新しい史料を加え、ささやかながら平和教育に供したいと願う。

【附記②】

本稿は厳密な史実検証をもとにした研究論文ではなく、これまであまりふれられなかった史料をもとに、概説的に解説したものであることを断っておきたい。

なお、現在の中国東北部を文中では、「満州」「満州国」というように（「洲」か「州」かの字体の不統一も含め）逐一、括弧で括弧することをせずに使用したが、繁雑さを避けただけのことであって、もとより「満州」は民族名であり、地域の名称ではない。

本稿を記すに当り、山辺悠喜子氏より資料「民心離反情況調書 錦洲憲兵隊」をご提供いただいた。記して感謝申し上げます。

【注記】

注1)「資料館（記念館）」の建設をめぐってはすでに同様の趣旨で1997年8月18日付け朝日新聞「青少年義勇軍の〈故郷〉町おこしへ記念館構想」として報じられている。

注2)上笙一郎氏の著作に関しては個々の史実に関しては歴史的検証は十分とはいえず、義勇軍の悲劇的顛末を強調し、同時にその生みの親である加藤完治の行動に多くの紙面を割く結果となっている。これらの論調に対する反論とし森本繁氏の文章があるが、いずれにおいても義勇軍をめぐる歴史的定位は確立されてはいない。

注3)岡部牧夫『満州国』182-183頁

注4)満洲移住協会では移住に関する多くの宣伝パンフを作成し、移住政策のもつ重大性、を訴えるのに貢献した。『満洲移住に就き農村青年諸君の奮起を促す』では「我国の現状と将来から見た重大性」「満洲国の現在と将来より見た重大性」「移民反対論は取るに足らず」などの論調が、また『成功途上の満洲移民』では「国境を案（みだれ）る者」「明朗なる移住地」などの煽動的な言辞を書き綴っている。

以下は後者の内容の一部である（3-5頁）。

満洲移民は吾が国防、政治、経済生活の国策であり、否むしろ現実の国策を超越した国民的信仰であるべきであります。（中略）悲観論の大部分は為にする流言、根拠なき憶測に基づくのであります。若しその論者が政治生活、社会生活に対して責任ある地位にある場合において、吾々は国策を案り、国論を惑わす者として、その無責任を糾弾せざるを得ないのであります。

今後、マスコミメディアが満洲移民政策に果たした役割についても十分検討され、議論

されるべきであろう。

注5)「満洲開拓青年義勇隊ハルビン特別訓練所概要」の「訓練要領」(11頁)では、次のように記されている。

軍事訓練は精神教育に重点を置き、規律生活の向上を期し、实际的軍事能力の涵養に努めつつあり。

注6) 当時の「訪問記」としてはほかに櫻井武雄のものをあげる。櫻井は農村青少年の大量満洲送出が国内の農村の荒廃に一層の拍車をかけることにならないかとの危惧を抱きつつ、報告の末尾にこう記している。(昭和13年4月記)

それにしても、はたしてかように大量な農村青少年を義勇軍に募集することができるであろうか。昨年八月長野県で青少年移民先遣隊百名を募集したとき、ちょうど同時に募集した満鉄従業員志願者の方へは五百七十余名の応募者が押しかけたが、少年移民に応募したものは八十名に足らなかった。満鉄従業員の方は小学校卒業だけで初任給四十五円、それに将来の月給や地位が誘うからである。少年移民の方には月給も地位も軍需工業景気もない。ただ将来満蒙開拓の基礎として、十町歩経営の独立農業者たることが約束されているばかりである。

この一方で、全国から義勇軍募集に応ずる状況をみて次のように総括している。

このことは、一つには現下の郷土農村がいかに深刻な行詰りに直面しているかを物語るものであり、また一つには、日支事変が青少年の間に大陸進出の機運を促進し、満蒙開拓の使命を覚醒せしめた結果であるということができよう。

義勇軍の顕彰については、教育界のみならず、学術界においてもこれに賛同する趣旨の紹介が累々と展開された。前者は、『教育』のほか、『日本教育』『興亜教育』などである。また、後者では、東京帝国大学教育思潮研究会の著作などをあげることができる。

注7)「建白書」は時局の趨勢に立つ情動的な文言に満ちた約2800字による「請願文」で、起草者は農村更生協会理事長石黒忠篤、満洲移住協会理事長大蔵公望、満洲移住協会理事橋本伝左衛門、同理事那須皓、同理事加藤完治、日本連合青年団理事長香阪昌康の六名。なお、義勇軍における「建白書」の意義は確かに大きいものがあるが、これだけを過大視するのではなく、創設から送出に至る経緯の〈複合的〉な要因をさぐることが肝要であろう。

注8) 現地では義勇隊訓練所に入所し、特技班なども有して開拓、開墾の実践指導がなされた。その後、義勇隊開拓団に移行する者、兵列に加わる者など「進路」は特定されなかった。なお、義勇軍は現地住民を刺激せぬようにとの配慮から渡満以降は義勇隊と称された。なお、関東軍による郵便検閲については「検閲月報」として残されていることが明らかになっている。(朝日新聞2003.4.24) また、その一部は2003.8.17.にNHKテレビ「配達されなかった手紙」でも紹介された。

注9) 福田はさらに「ここに描かれる現実は、満洲農村の新文化への道につながり、ほかには満

洲文学の一地盤のみならず、日満をふくめて新しきアジア文学の新芽である」と粉飾絶賛している。

注10) 第一回全満洲男女青少年「生活記」に応募された作文を元に組まれたもので計42編を収める。編集は満洲国協和青少年団中央統監部。主編は序文も書いた作家、川端康成。引用文は原文を現代仮名遣いに直した。詳しくは田中（2001）を参照。

注11) 「満洲に於ける日本開拓政策に関する罪業」については古海忠之の供述書にも記されている。『侵略の証言』148-163頁。

注12) 「満洲開拓青少年義勇隊の使命」前川義一（満洲開拓青年義勇隊訓練本部総務部長）の文による。『満洲国政指導総覧』収録。486—490頁。なお『指導総覧』は以降、毎年発行されるとあるが、康德10年刊のみ参照した。刊行趣旨として、前言には「親邦日本と同生共死、興亜聖戦を完遂するには、政府は政治力を強化して益々国政の浸透を図り、国民は国策に対し全幅的信頼と積極的協力を為すこと最も肝要である。これ本書を発刊したる所以にして、…」とある。

注13) 山室信一『キメラ』p.287

注14) 本土防衛のための「国民義勇隊」「義勇戦闘隊」の編成については土門周平他（2001）を参照。45—53頁。もちろん、義勇軍とこれらの末期的編成を同次元で論じることには無理があるが、人民玉砕の「盾」としての発想では通底するものがあると考ええる。

注15) ユートピアとしての「満洲移民」策にマスコミメディアが大きく関与した事実についてはルーズ・ヤング『総動員帝国』の第四部などを参照。

注16) 日本各地の戦争遺跡には義勇軍関係遺跡も少なくない。山梨県甲府町の護国神社に建てられた義勇隊之碑には、「…五族協和の王道楽土を築くには日本民族の移住を進め堅実なる農業国家の建設を以って国礎の中核とするためその最も適切有効な実行方法として、満蒙開拓青少年義勇軍の創設を図り心身共に健全な青少年を選抜し数ヶ所の重要地点に訓練所を設けてここに入所せしめて開拓訓練を始め一般教育及び軍事教練更に農業経営に必要な知識技能を修得させ日満を貫く雄大な理想郷の建設に従事せしめ将来の移民地を確保し、一方日本の生命線である現地兵站の万全を期することであった…」と記されている。義勇軍の置かれていた状況がいかに「複合的な戦略的要素」にもとづくものであったかが分かる。

注17) 加藤完治については中村薫のものが簡潔にまとめられている。戦後、GHQの調査を受けた際、大和魂の意味を問われて「人に親切にすること」と答え、無罪放免になったという話は有名である。以下、前掲『侵略と証言』による略歴を記す。

略歴：1884-1967。農本国家主義者。帝国農会、愛知県立安城農林学校を経て山形県自治講習所長になり、開墾教育に従事。1926年茨城県に日本国民高等学校を創設し、校長となる。満洲事変を契機に農林官僚石黒忠篤、農政学者那須皓、橋本伝左衛門、関東軍司令部の東

宮鉄男らと満洲農業移民の実施を提唱，移民教育に取り組んだ。

成人移民が困難になった日中戦争期には青少年の送出をとなえ，満蒙開拓青少年義勇軍制度の生みの親として義勇軍訓練所長をつとめた。戦後追放されたが，53年日本国民高等学校校長に復帰した。

【参考文献】原則として年代順にあげた。（一部本文紹介のものを省く）

満洲移住協会理事長・貴族院議員男爵大蔵公望『満洲移住に就き農村青年諸君の奮起を促す』満洲移住協会 昭和11年4月

満洲移住協会理事佐藤貞次郎『成功途上の満洲移民』満洲移住協会 昭和11年5月

拓務省拓務局『満蒙開拓青少年義勇軍現地通信集 第一輯』（非売品）1938.3.

櫻井武雄「視察と訪問 満蒙開拓青少年義勇軍一百万人訓練の道場を視る一」『教育』岩波書店昭和13年4月号

林房雄「アジアを拓く少年義勇軍」『文藝春秋』昭和13年（1938年）5月号

小野正太郎「満蒙開拓青少年義勇軍に就いて」東京帝国大学教育学研究室教育思潮研究会編『教育思潮研究』第12巻第2輯 昭和13年5月

間宮茂輔「農村踏破記—満洲集団移民の郷土を見る」『文藝春秋』昭和13年11月号

満洲拓殖公社『満洲開拓青年義勇隊訓練用 満洲語会話書（其一）』昭和13年

満洲拓殖公社『満洲開拓青年義勇隊訓練用 満洲語会話書（其二）』昭和14年

櫻井武雄「新東亜建設と移民問題」『教育』岩波書店 昭和14年3月号

小野正太郎「満蒙開拓青少年義勇軍の訓練に就いて」東京帝国大学教育学研究室教育思潮研究会編『教育思潮研究』第13巻第10輯（「青年教育」，六，外地の青年教育）昭和14年7月

満洲国協和青少年団中央統監部編『満洲国の私たち』中央公論社 1942

『満洲国立開拓指導員訓練所 満洲国立基幹開拓農民訓練所 満洲開拓青年義勇隊哈爾濱特別訓練所 満洲開拓青年義勇隊嚮導訓練所 概要』昭和15年6月（発行元不明）

石山侑平「満蒙開拓青年義勇隊の教育」東亜教育協会『興亜教育』第一巻第3号 昭和17年3月 緑陰書房復刻 2000

蒲池篤「転換期に立つ満蒙開拓青少年義勇軍の諸問題」東亜教育協会『興亜教育』第一巻第7号 昭和17年7月 緑陰書房復刻 2000

福田清人「義勇隊の文学」同『興亜教育』第一巻第8号 昭和17年8月 緑陰書房復刻

満洲産業調査会『満洲国政指導総覧』康德11年（昭和18年）12月 新京（現長春）

小林秀雄「満洲の印象」志賀直哉他監修『世界紀行文学全集12中国Ⅱ』修道社 1971

...

鶴見俊輔他編『記録現代史 日本の百年 4 アジア解放の夢』筑摩書房 1967

小林夕持『ヤチボウズの根性 元満洲開拓青年義勇隊員が綴る』私家版 1969

東寧会『満洲開拓青年義勇隊東寧訓練所第一中隊記 鳴々東哈達湾』昭和46年 非売品

上笙一郎『満蒙開拓青少年義勇軍』中公新書 1973

「満洲農業移民史研究の基礎資料 I ～ X」

浅田喬二，柚木駿一，高橋泰隆，君島和彦，田中恒次郎，小林英夫，依田憲家

『龍溪』1974，1975 No.8，9，10，11，12，13号 龍経書舎

全国拓友協議会編『写真集 満蒙開拓青少年義勇軍』家の光協会発行 1975

満洲移民史研究会編『日本帝国主義下の満洲移民』龍溪書舎 1976

森本繁「満蒙開拓青少年義勇軍に関する虚像と実像」『季刊満洲と日本人』満洲と日本人編集委員会編 大湊書房 1976.1.

管野正男「鉄の戦士となって 満蒙開拓青少年義勇軍の訓練生活」『別冊一億人の昭和史日本植民地史2 満洲』毎日新聞社 1978

岡部牧夫『満洲国』三省堂選書 1978

創価学会青年部反戦出版委員会『戦場に軋む若者の心 満蒙開拓青少年義勇軍の記録』戦争を知らない世代へ52 和歌山編 第三文明社 1979

石川道彦『永遠にさよならハルビン 満洲移民救援記』まつやま書房 1982

創価学会青年部反戦出版委員会『開拓の美名の下で 満蒙開拓青少年義勇軍の記録』戦争を知らない世代へ17 茨城編 第三文明社 1984

『新編埼玉県史別冊 曠野の夕陽 埼玉県満蒙開拓青少年義勇軍の悲劇』（非売品）1984

中村薫『加藤完治の世界』不二出版 1984

白取道博「『満蒙開拓青少年義勇軍』の創設過程」『北海道大学教育学部紀要』45号 1984.12.

白取道博「『満洲』移民政策と『満蒙開拓青少年義勇軍』」『北海道大学教育学部紀要』47号 1986.2.

白取道博「『満蒙開拓青少年義勇軍』の創設」教育史学会『日本の教育史学 教育史学会紀要』29集 1986.10.

金賛汀「朝鮮からの開拓移民，残された満洲問題」朝日新聞1986.10.8. 夕刊

櫻本富雄『満蒙開拓青少年義勇軍』青木書店 1987

陣野守正『先生，忘れないで！「満洲」に送られた子どもたち』教科書に書かれなかった戦争 Part 6 梨の木舎 1988

白取道博「『満蒙開拓青少年義勇軍』の変容（1938～1941）—『郷土部隊編成』導入の意義—」『北海道大学教育学部紀要』54号 1990.2.

山室信一『キメラ—満洲国の肖像』中公新書 1993

蘭信三『「満洲移民」の歴史社会学』行路社 1994

高橋幸春『絶望の移民史—満洲に送られた被差別部落の記録』毎日出版社 1995

高橋泰隆『昭和戦前期の農村と満洲移民』吉川弘文館 1997

川北哲『挫折した青春 満洲開拓青少年義勇隊桑山中隊の記録』桑山会 和歌山貴志川町 1997

(非売品)

伊藤宣正編『教科書が書かない戦争 満蒙開拓青少年義勇軍 中学生も平和を考える』(非売品)
1998

田原和夫『ソ満国境15歳の夏』築地書館 1998

佐藤福都『北満の青春』新風舎 1998

陣野守正『歴史から隠された朝鮮満州開拓団と義勇軍』教科書に書かれなかった戦争 Part29 梨
の木舎 1999

新井利夫・藤原彰『侵略の証言 中国における日本人戦犯自筆供述書』岩波書店 1999

長野県歴史教育者協議会編『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』大月書店 2000

駒込幸典「青少年義勇軍の送出と教育会」『市誌研究ながの』第5号 2000

白取道博「『満洲建設勤労奉仕隊』に関する基礎的考察」『北海道大学教育学部紀要』80号 2000.2.

山本礼子「占領政策から見た『満蒙開拓青少年義勇軍』その政策決定過程と募集への教師の関与
を中心に」『明星大学教育センター紀要』12号 2000.3.

倉橋正直「『満州国』をめぐる三つのウソ」『季刊中国』No.63 季刊中国刊行委員会 2000

小林英夫・加藤聖文「欺かれた『王道楽土』『満州国』 関東憲兵隊検閲史料が語るもの”

統制下『満州国』の生活」『世界』2001年2月号 岩波書店

土門周平ほか『本土決戦 幻の防衛作戦と米軍進攻計画』光人社NF文庫 2001

村上隆夫『満蒙開拓青少年義勇軍始末記』日本図書刊行会（近代文芸社発売）2001.5.

ルーズ・ヤング『総動員帝国—満州と戦時帝国主義の文化—』加藤陽子他訳 岩波書店 2001

金賛汀「満洲に渡った朝鮮民族」『環』Vol.10 特集 満洲とは何だったのか 藤原書店 2002.
summer

蘭信三「『満洲移民』の問いかけるもの」『環』Vol.10 特集：満洲とは何だったのか 藤原書店
2002.summer

高橋幸春「満洲に送られた被差別部落」『環』Vol.10 藤原書店 2002. summer

小都晶子「『満洲国』政府による日本人移民政策実施体制の確立と『日満一体化』」『現代中国』第
77号 日本現代中国学会

【中国側史料】

姜念東・伊文成・解学詩・呂元明・張輔麟『偽満洲国史』吉林人民出版社 1980

朱海挙「日本帝国主義向我国東北進行“青少年義勇移民”的軍事目的」『東北師範大学報』哲学
社会科学版 1986年第二期

王承礼主編『中国東北淪陷十四年史綱要』中国大百科全書出版社 1991

王承礼，常城，孫繼武総主編『苦難与闘争十四年』（上・中・下）中国大百科全書出版社 1995

左学徳『日本中国東北移民19051905史—至1945年—』哈爾濱工程大学出版社 1998

劉含發「満州移民用地の獲得形態と特徴」『現代社会文化研究』19集 新潟大学大学院現代社会文化研究科 2000

高楽才「日本“百万戸移民”国策評析」『歴史研究』中国社会科学雑誌社 2000

高楽才『日本「満洲移民」研究』中国・人民出版社 2000

孫春日「“九・一八”事変後日帝対中朝日三民族移民政策之比較」『東疆學刊』2000.4. 中国・延吉

範立君「“九一八”事変後東北地区華北移民動態の考察」『中国現代史』2002年第7期 中国第二

歴史当案館「日本対東三省移民概況」『民国当案史料』

孫繼武，鄭敏主編『日本向中国東北移民的調查与研究』吉林文史出版社 2002

劉含發「日本人満洲移民用地の獲得と現地中国人の強制移住」『アジア経済』44巻4号 アジア経済研究所 2003

高楽才「日本対華“武装移民”政策及其戰略」『日本学論壇』長春 2003.4

陳鵬「試談“九一八”事変後日本対東北的移民侵略」牡丹江師範学院学報：哲社版 2002.6

李惠康，李広「抗戰時期日本帝国主義对中国淪陷区農業掠奪」『湘潭師範学院学報』社哲版 2003.2.

李淑娟「日本帝国主義対東北移民侵略特点之剖析」『学术交流』（哈爾濱）2003.2

附表：満蒙開拓青少年義勇軍 略年表

（『新編埼玉県史別冊 曠野の夕陽 埼玉県満蒙開拓青少年義勇軍の悲劇』（非売品）1984をもとに作成）

昭和 7年 3月1日 「満洲国」建国

8月16日 満洲移民案閣議を通過

10月3日 第一次試験移民渡満

12月26日 関東軍特務部内に移民部を設置

昭和 9年 2月24日 牡丹江省鏡泊湖のほとり，学園村建設のため学園生入植義勇軍の草分けとなる。

9月16日 暁河地区に少年隊入植，大和村北進寮を建設。これを暁河少年と呼称した。

昭和 10年 11月21日 満洲移住協会設立

昭和 11年 1月4日 満洲拓殖株式会社設立

2月26日 二・二六事件勃発

昭和 12年 4月 財団法人満洲移住協会設立，従来の移住協会を吸収。

7月7日 蘆溝橋事件，日中戦争はじまる。

7月15日 関東軍青年農民訓練所創設要綱を発表。

- 8 月 青少年隊30名城子河，哈達河に入植。
- 9 月14日 青少年訓練生，100名北安市嫩江縣拉哈に入る。
- 9 月15日 滿洲拓殖公社設立，従来の滿洲拓殖株式會社を吸収。
- 11月 3 日 滿蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書が政府に提出される。
- 11月30日 滿洲への青年移民送出に関する件，閣議通過。
- 12月22日 滿洲青年移民実施要綱を決定。
- 昭和 13年 1 月 昭和13年度青少年義勇軍募集要綱決定，募集開始。
- 3 月 茨城県東茨城郡下中妻村内原に滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所を正式に設置。
- 4 月 1 日 拓務省内に東亜第三課を設置，青少年移民事項主管課となる。
- 昭和 14年 4 月 1 日 滿洲開拓青少年義勇隊訓練本部が新京に開設。
- 昭和 16年 10月 1 日 第一次義勇隊七一個團17172名，義勇隊開拓團に移行。
- 12月 8 日 太平洋戦争勃発。
- 昭和 17年 10月 1 日 第二次義勇隊四三個團開拓團に移行。
- 10月31日 拓務省解散，大東亜省に引き継ぐ。
- 昭和 18年 10月 1 日 第三次義勇隊三六個團開拓團に移行。
- 昭和 19年 6 月 1 日 第四次義勇隊五一個團開拓團に移行。
- 7 月18日 東條内閣総辞職，7 月22日小磯内閣成立。
- 11月 1 日 義勇隊訓練生の臨時に軍派遣を命ぜらる。
- 12月 1 日 義勇隊戦時勤勞挺身隊を命ぜらる。
- 昭和 20年 5 月 義勇軍幹部及び団員に対する関東軍の緊急現地召集始まる。
- 6 月 1 日 第五次義勇隊四五個團開拓團に移行。
- 7 月 現地召集により義勇隊及び訓練所は機能を失う。
- 8 月 9 日 ソ連参戦滿州侵入によりすべての開拓團，訓練所は崩壊し，避難民となり逃避行に移る。
- 8 月15日 戦争終結，滿洲国内は壊滅状態になり，多数の死亡者を出す。
滿洲国消滅，開拓民は逐次本土に引揚げ，滿洲開拓事業に終止符が打たれる。

史料：滿蒙開拓少年義勇軍編成に關する建白書

(仮名遣いはそのままにし、原文縦書きを横書きとした)

熟々我國の前途を考ふるに支那戰局の廣汎なると國際情勢の險惡なるとは、此の事變を契機として未曾有の國難を招來しつゝあるを思はしむ。此の秋に當り、全國民は其の戰線にあると銃後にあるとを問はず、斷じて百難を克服し、國運の進展を期せざるべからず。而して銃後國民の上下一致して達成すべき最緊急事は、速に滿洲國をして眞に我が盟邦として日滿一體の實を挙げしむるにあり。

曩に我が國策として滿洲大量移民の決定せられたる所以は、日滿一體の根柢を築くには我が農民を移し、以て堅實なる農村を建設し、國礎の中核たらしむるにあることを確認したるに存す。然るに此の國策實行の緒に就かんとするに當り、偶々事變に際會して、世上或は之を忘れ、或は諸種の困難に籍口して之を阻まんとする者あり。これ實に思はざるの甚だしきものと云ふべし。蓋し滿洲國をして眞に日本民族を指導者とする五族協和の王道國家たらしめ、東洋十億の民衆に其の嚮ふべき所を啓示することこそ、日支紛争の禍根を斷つ大道なるを以てなり。然らずして、徒に滿洲國をして或は赤露の機を窺ふに委し、或は民族協和の要礎を缺けるがまゝに推移せしめんか、如何に當面の戰局に連戰連勝するも、東洋永遠の平和、日滿國運の前途逆睹し難きを懼る。我等之に關し現地の緊迫せる情勢と切實なる要望とを熟知せる者は、實に此の際滿洲移民國策擴充即行の急務なるを痛感するものなり。而して其の最も適切有効なる實行方法として、茲に滿蒙開拓青少年義勇軍の編成を提案し、之が即時斷行を要請せんとす。

滿蒙開拓青少年義勇軍の爲さんとする所は、我青少年を編成して勤勞報國の一大義勇軍たらしめんが爲に、全滿數ヶ所の重要地點に大訓練所を設けて此に入所せしめ、開拓訓練即教育、軍事教練即警備なる現地の環境に即せる方法によりて、日滿を貫く雄大なる皇國精神を練磨せしめ、之を以て他日堅實なる農村建設の指導精神たらしめ、併せて滿洲農業經營に必要な智識技能を修練せしむるにあり。斯くして大訓練所の課程を了りし者は、逐次鐵路自警村、既設移民團、將來の移民根據地等に設けられつゝある中小幾多の青少年訓練所に轉出せしめ、更に修練を重ねると同時に、之に依りて、或は國策移民の完成を助け、或は將來の移民地を管理し、或は交通線を確保し、一朝有事の際に於ては、現地後方兵站の萬全に資する所あらんとするものなり。而して之等の課程を終了せる者より漸次之を國策移民の基幹部隊として適宜集團土着せしめ、盟邦の根柢を築かんとす。尚ほ彼らの中滿十七歳以上の者は、現行制度に於ても志願兵たるの資格あるが故に、之等の者の爲に大訓練所と連繋して志願兵部隊を特設するも亦、時局に適應せる一策たるべし。

此種の企圖に關しては、已に有志相謀りて、昭和十年以來青少年の爲に饒河に北進寮なるものを設立し、目下約百名を訓練しつゝあり、拓務省亦茲に見る所あり本秋伊拉哈に三百名の青少年を先遣入植せしめたり。之等青少年の實績を見るに、士氣旺盛にして規律嚴正、氣候風土への適

應力強くして健康佳良、農耕に於ても、將又、設營、行軍、警備其他諸般の訓練に於ても、純眞快活事に従ひ成績極めて優秀にして、斷然一般成人移民を凌駕するの状勢にあり、之を視察せる人士をして感激措く能はざらしむ。されば此の提案は現地に於ては既に關東軍、滿洲拓殖委員會を始め、滿洲國政府諸機關、滿洲拓殖公社、南滿洲鐵道株式會社、並に既設移民團等各方面の絶大なる支持後援を得、既に嫩江、鐵麗、寶清等に於て着々大訓練所設立の準備を進めつゝあるの外、鐵道沿線各所、既設各移民團等に於ても中小の訓練所を計畫しつゝあり。

現地の事態斯の如し、今や滿蒙開拓青少年義勇軍が大舉渡滿すべき機將に熟せりと云ふべし。而して我政府の負擔すべき經費に至りては、青少年一人に對し約二百五十圓、緊急所要人員を充す爲に昭和三十三年度内に於て開設せんと欲する五ヶ所の大訓練所收容人員合計五萬人に對しては、合計約一千二百五十萬圓に過ぎず。國家財政非常の際と雖も、此の義勇軍の活動により節約し得る直接間接の國防費の巨額なるに想到せば本事業に對する所要金額の如きは敢えて云ふに足らざるなり。若し夫れ、之が有形無形の効果に至りては、舉げて算ふべからず。就中、茲に我等の力説せんと欲するは、此の一舉が明日の日本を背負ふ青少年一般に及す精神的効果に付てなり。

凡そ皇國の眞の國難は、外敵の如何にあらずして國民思想の健否に存す。政府の國民精神總動員を提唱する所以、亦之に外ならざるべし。然るに今日の國內情勢は、青少年の精神を鍛鍊陶冶し、其の士氣を愈々旺盛ならしむるべき環境に乏しく、銃後に於て動もすれば第二義的活動に心身を消耗せんとする實情にあり。青少年義勇軍は斯る危機を轉じて眞に國民精神を作興する一大國民運動たらずんばあらず。

若し夫れ刻下の情勢に於て、斯の如き多数青少年子弟の應募を期待し得るや否やの問ひに對しては、我等は斷じて憂ふるの要なしと明言せん。何となれば、之を現在我國人口構成の統計に觀るに、滿十五歳以上十八歳の農家子弟大約百五十萬、其内郷土を離れて他に職を求むるの已むなきもの大約七十萬を算す。之等青少年の過度なる都市集中が、或は多数の失業者群を發生し、或は國民體體質の低下を誘致し、或は各種社會問題、思想問題の因となる等國家民族の將來に如何に大なる疾患を齎すべきやは、我等の憂慮に堪へざる所なり。近時軍需工業賑盛を極め、多数の青少年工を吸集しつゝあるも、尚ほ幾多の青少年は農村に待機しつゝあるのみならず就職年齢（略滿十五歳）に達しては離村すべきもの年々約二十萬を算す。茲に義勇軍編成の事を掲げて、希望に充ちたる生活の門戸を開き、最も有意義なる銃後報國の方途を示すに於ては、全國の子弟は翕然之に應じて起ち、父老亦欣然之を賛するを疑はず。現に此の企圖を傳へ聞ける地方に於て、鶴首其の實行を待望しつゝあるの事實は之を證して餘あるべし。

要するに青少年義勇軍の擧たるや、現下の大勢之が即行の要を告ぐること洵に急なるものあり。現地に於ては、既に之を迎ふべき萬端の用意あり。國內に於ては巨萬の子弟農村に待機せり。冀くは國家として之を採り、即時斷行、以て日滿兩國の根柢を不動ならしめ、東洋永遠の平和を確立せられんことを敢て非禮を顧みず。

右謹みて建白す

昭和十二年十一月三日

農村更生協會理事長	石黒忠篤
滿洲移住協會理事長	大藏公望
滿洲移住協會理事	橋本傳左衛門
滿洲移住協會理事	那須 皓
滿洲移住協會理事	加藤完治
日本聯合青年團理事長	香阪昌康

表1 義勇軍が応募より内地及び現地の訓練を経て現地に定着するまで
(朝日新聞社「満蒙開拓青少年義勇軍」昭和14年、51頁を見やすく表記した)

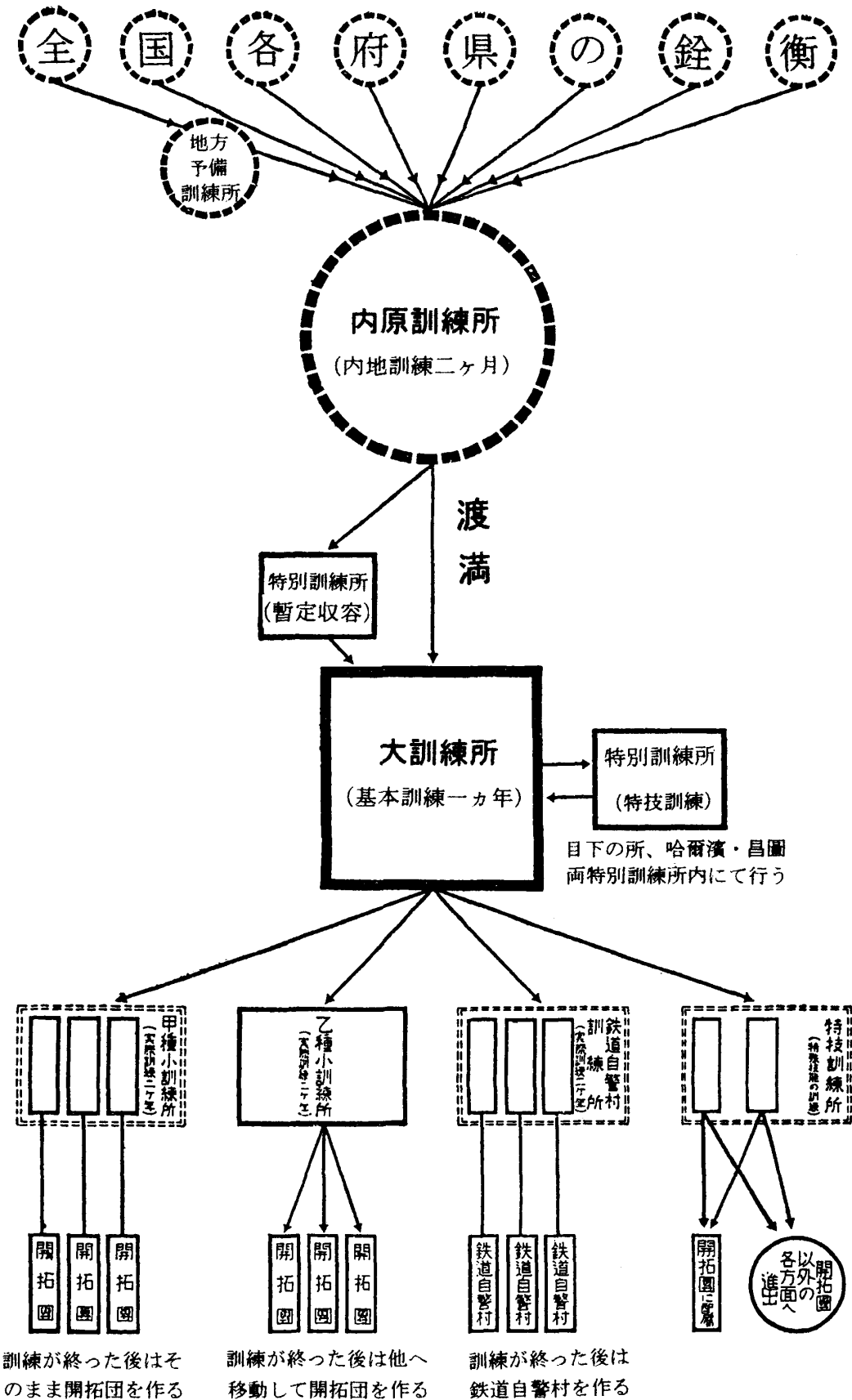
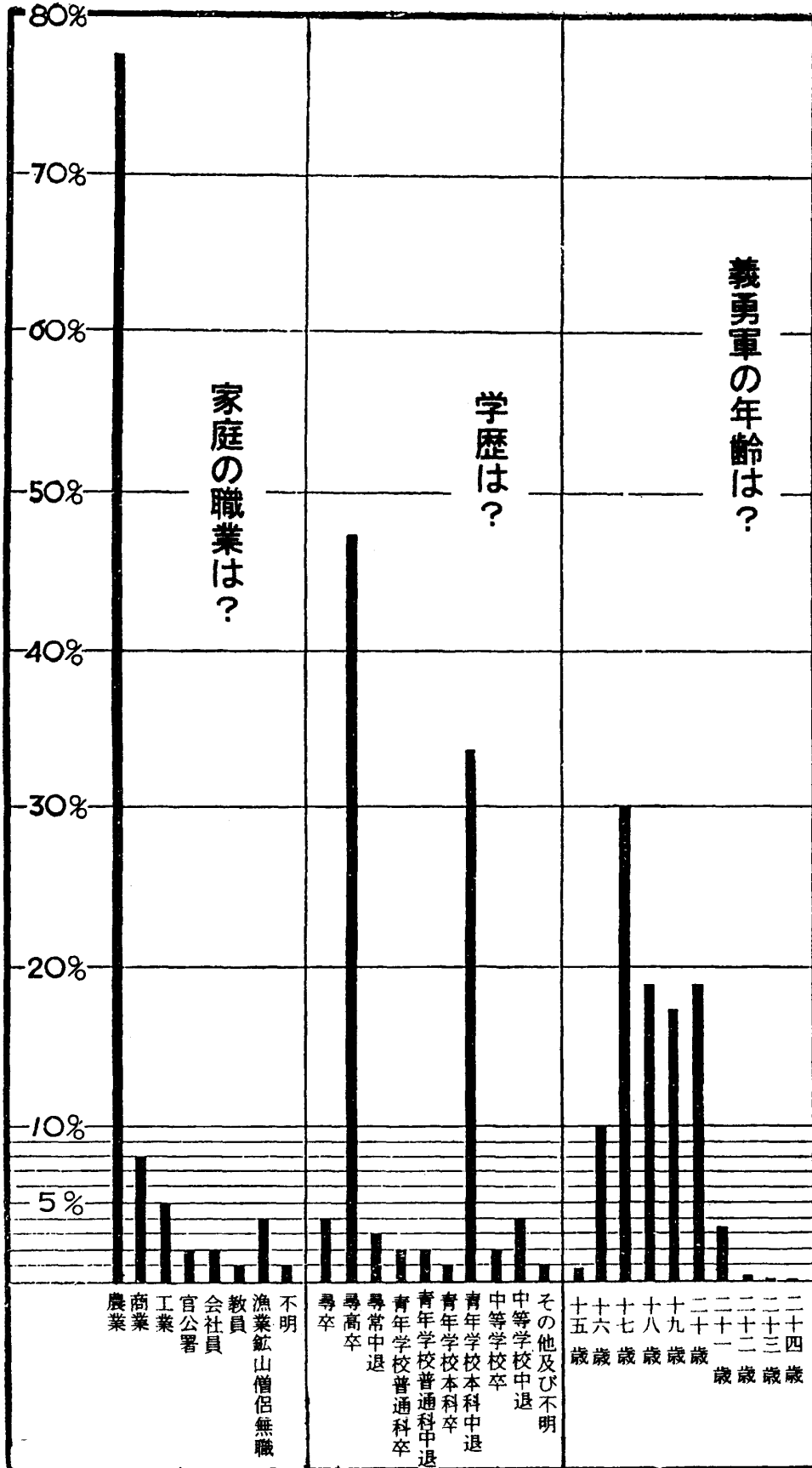
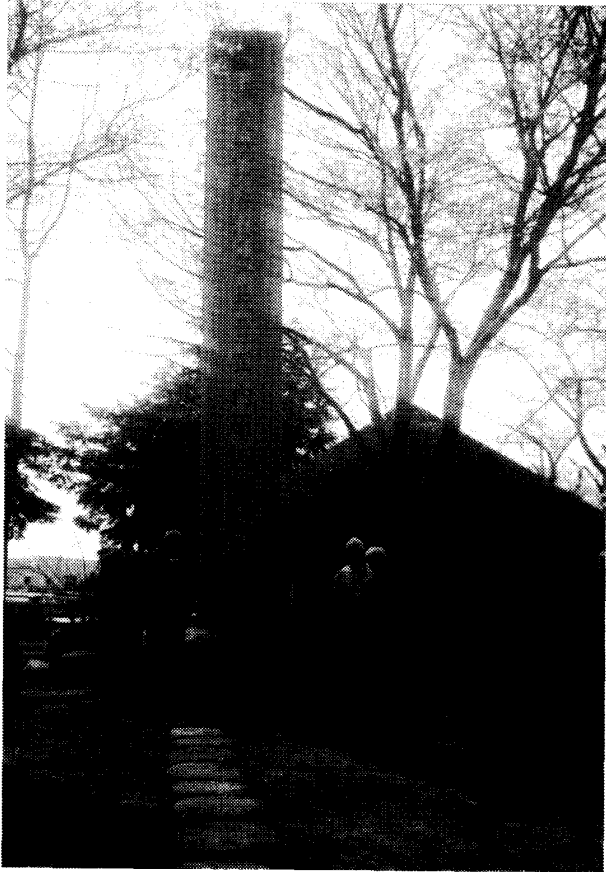


表2 義勇軍の家庭の職業・学歴・年齢

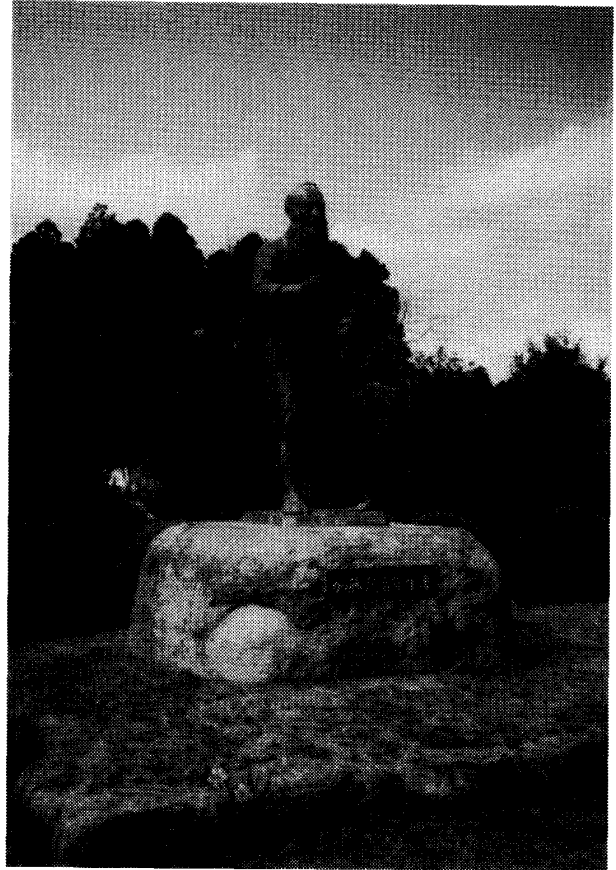
—いずれも昭和14年2月、千七百余名について調査—

(朝日新聞社「満蒙開拓青少年義勇軍」昭和14年、63頁を見やすく表記した)





日輪舎（再現模型）と内原訓練所の碑
いずれも2001年4月筆者撮影による。



加藤完治銅像（日本農業実践学園にて）



内原訓練所跡地にある義勇軍殉難の碑